

兩人の姓名があらはれて居るものと見なければなりません。

牟良叔舎とありますのは、察するところフランシスコ何某と申したのを聞き僻めまして、これに漢字をはめたのでありませう。第二のは姓名共にあるらしいのですが、キリシタとあるのは名に違ひありません、但しキリシタといふ名は實際ありませんから、多分これはクリストバンと申したのを聞き僻めまして音譯したものであらうと思ひます。佗孟太は、たしかにダ・モタでありまする。左様致しますると、鐵炮記に上つて居る兩人は、一名は唯フランシスコだけで姓がありません。さだめしフランシスコ何某と當人は申したのでありませうけれども五峯の耳が到底そんな名を承知しませんので、姓を缺いてしまつたのでありませう。一名の姓名は、比較的によく出来たと見なければなりません、しかしこれも三名居りました中の今一名の名を混同致しまして出来て居るかも知れませんが、その邊のところも考へなければなりません。何様五峯のマライ語も、あまりお上手でなかつたらうし、ポルトガル人等も聞きかぢりであつたらうし、その上に持つて參つて漢字を以てうつしたと來て居るのですから、よほど不確實なものであるのです。

ピントの申すところによれば、やはり都合三名で、著者自からの外に兩名居りますのはクリストバン・ボラリオとデエゴ・ゼイモトとであります。然るところがこのボラリオと申す姓の人、ならびにピントの兩人は、巡回記以外の史料には頓と出て參りません。それは其筈である。ボラ

リオはピントと共に府内邊で商業をして居た男でありまして、固よりピントと同じやうに後に來朝しました商人であります。ピントは自己の書翰に種子島發見に關係なきことを間接に自白して居りますから、ボラリオも矢張り關係がないのであります。何に致してもクリストバンと申す名は鐵炮記にあればあるのですが、その他にはピントが出ておくだけであります。又ピントはゼイモトの名をデエゴと申しますが、ガルバンやコイトは、名をフランシスコと申して居ります。

かやうの次第でありますので、ゼイモトはガルバン、コイト、ピントの三證人を控へて居ります。他のものはこの男より證人の都合がわるいのであります。とにかくダ・モタはガルバンコイト、文之と三名證人をひかへて居ります、但し文之はダ・モタの名をクトストバンと致して居りまして、ガルバンやコイトとは違つて居ります。その代りに文之は姓不詳のフランシスコといふものをあげて居ります。この邊あたりから見ますれば、ダ・モタとゼイモトだけは先づ成立ちさうである。ところが三人目の男に甚だ困るのである、ガルバンはペントといひまするし、コイトはペインタといひまする、しかしこれは聊かの違ひで同一の姓であること、先づ以て疑はありますまい。不幸にもその姓は文之もピントも書いておきません、文之はあたまから二人より人をあげておきませんから、三人目の男の名がわからんのは、あたりまへであるが、ピントは三人あげておきまするに拘はらず、この男を出しておきません、却つて得手勝手にボラリオと著者自分の



名をかゝげておくのであります。

かやうに申すと、ピントに對しまして、實にひどい告發のやうに相成りまするが、我等のひそかに疑ふて居るのは、ピントは、アントニオ・ペントから種子島に於けるその事蹟を承はりまして、當人が死んだかどうかしたのを幸ひに自分の事蹟として大法螺を並べたのではありますまいかと思ふて居るのである。巡回記に書いてあることが、不思議にもよくわかつて居るのに拘はらず、著者の名がガルバンにもコイトにも出て來ぬといふのは、何とも以て合點のゆかぬことであるのです。ピントはもと／＼海賊でありまして、詐欺や強盜などをするを何とも思つて居る筈の男ではありません。我等の疑ひを本人に洩らしたところで、本人は別に怒りも致しません、この頃のポルトガル人にとりましては、所謂切り取り強盜は武士の習ひで、朝飯前の仕事であつたのです。それゆゑに、かやうに我等は疑ふのであるのです。

假りにかういふことであるとして見ますると、つまりガルバン、コイト、文之とこの三人の證言を綜合致しまして、ダ・モタ、ゼイモト、ペント三名のものが本邦へ參つたのであつた。但しこの中のダ・モタの名を文之はアントニオとは申さんでクリストバンと申す、ゼイモトと申す姓を知りませんで唯フランススコと申す名だけを擧げておきます、ペントに至りましては、文之は、あたまから書かぬので、ガルバンとコイトとが證明致すのである。

大體これでもよろしい様であるが、文之が何故にダ・モタの名をクリストバンと申したのであるか、その説明がつきません。この邊は、尙一層考へて見ねばなりません。要しまするに本題は六等乃至七等の史料より引出さねばならぬことでありまするで、結局未詳と致しまするのが最も正確なものでありませう。しかし未詳と申すのは、いかにも心外でありまするで、上に申上げる如くに説を立てたのであります。もとより決定と申す程度には參り兼ねます。先づ學説であります。この西洋人始めて來朝のことにつきまして、我等は曾て鐵炮傳來考と題して史學會雜誌第三編二十九號、三十號、三十一號に亘つて説を述べたことがありましたが、當時はまだガルバンの世界發見記を持つて居らなうですし、その他にも意見が少々今とは違つて居ります。又雑誌に載つて居る論文中には、ポルトガル人の姓名などにも讀みかたに間違ひがあります。又かた／＼訂正を致したつもりでありまするで、そのおつもりで御讀みを願ひます。

ロ、唯一史料の場合。

史料が何にも彼にも唯一品よりないといふことは、史學事項に對しまして随分例のあることでありまして、この場合の心得かたには随分注意を要します。唯一の史料と申すのは、地理であれ建築物であれ物品であれ書籍であれ、何れでも宜しいですが、つまり證據物件が唯一つよりない場合であります。この場合におきましての第一の手續きは、この唯一の史料が何品であるかといふこと



の穿鑿であります。もとより唯一の品でありますので、他に比較すべきものが無い筈である、書籍の場合であるならば、誤脱等がありはしないか、校訂をすることも出来ぬ筈なのであります。随つて頗る困難なこととなるわけであります、それ故にその品の性質を第一に穿鑿してかゝることであるのです。

例によりまして成るべく簡單なる場合から擧げますならば、先づ書籍でありませう。茲に一つの史學事項に關しまして一つの記事がある、但しこの記事は唯一つあるきりでありまして、他の書籍には類似のものも出て來ぬといふ場合であるのです。左様致しまするといふと、書籍の製作年代、場所、著者の人物に就きまして、極めて精密の調査を致します。苟くも年代なり場所なり人物なりにおきまして、聊かにても疑をおくべき點を發見致しますれば、それだけの斟酌を致しまして記事を読みます。就中著者の人物が甚だ覺束ない場合でありますれば、あたまから棄て、しまひます。場合によりまして、参考としてとつて置くこともあり得ますが、要するに少しも重きをおきません。

さすれば唯一史料が史家の考案に上るといふ場合は、その史料が先づ以て確實である場合に限ることであり得ます。若しこの類の史料にして、先づ完全と認むべきほどの然るべき程度のものでありますならば、さしかた差當りその申立てるところの證據をそぐり、受理致しまして、そのまゝ傳へるより外ございませぬ。若し他日新らしい史料が出て參りまして、新らしい證據を提出致しまするならば、その時分には違つた説が出て來るだけのことである。かやうなる場合に立至りまして話を變へまするのは史家におきまして決して耻辱になることとなし、科學的研究の結果と致しまして、萬々已むを得ませぬ決定であります。

若し又幾分かも可然程度が下つて居りまして多少疑を容るべき餘地がありますならば、斟酌を加へて記しておきまして、後日新らしい史料が出ましたときには訂正を加へる準備を致して置くことである。

大體に於ての心得かたは、かやうなことでありまして、この場合にどう致すかといふことは、一にその場合の事情によることでありまして、あらかじめ精密なる方針を申上げるわけには參りません、例によりまして次に一二の實例を申し上げます。

#### 第一例。

イタリヤの南方に居住致して居りました部族で、ラテン人とほゞ同一人種に屬して居りましたもので又ローマ人と極めて緻密なる交渉を致しましたサムニテ人と申すのがあります。これが通常の歴史本に書いてあるところによりますれば、頗る質素で武張つた者共で、遊牧を以てその業務と致して居つたことで、さすがのローマ人もこのサムニテ人を服従するか、さもなくば自



から彼等に亡されるか、どちらか一つの場合であつたので、これがために長い間非常な苦戦をしたことであつたのです。この邊のことは、ありふれた教科書を御覽になつても直ぐおわかりになることである。然るにサムニテ人の文化の程度は、どれほどのものであつたかといふことにつきましても、一向にわかつて居らん、甚だしきは殆んど未開の姿にでもあつたかの如くに書いてあるものもある。

然るにサムニテ人の文化につきましても、唯一の史料があります。それは南イタリアのベストの近邊、即ちサムニテ人の占領地でありましたところであるが、こゝにサムニテ人の墳墓がありまして、近年發掘致しましたところが、壁書を數枚得ました。何様古いものでありますからして、非常に剝落は致して居りますが、とにかく油畫でありまして、當時のギリシア式の畫であらうと思はれるのである。この壁書には何が書いてあるかといふに、何れも皆軍人が凱旋して参りまする圖であります。騎馬のものもあれば徒歩のものもある、婦人が家の門に立つて軍人等のかへつて来るのを祝して居る姿であるのです。

その武裝を見まするに、全くギリシア式の甲冑でありまして、持つて居りまする鍔が、先づ固有のものかと思はれるのである。ギリシア式の甲冑は、南イタリアにおきまして屢々發見致しまするもので、實用の品と儀式用との差別があつて、精巧の度合は非常に違ひますが、とにかく

形式はきまつて居る。サムニテ人の壁畫にありますが、實用の甲冑であります。又婦人の着物を見まするに、純粹のギリシア服であります。この邊より見ますれば、何様サムニテ人は、内地に居るとは申せ、海岸邊に植民致して居りまするギリシア人と必らず交通致して居つたに相違のないのでありますから、早くよりその文化をうけまして、かくの如く服裝まで全然ギリシア流となつて居つたものと見える。服裝までがギリシア流である位なら、その他のことにおきましても、ギリシアの影響を受けたに相違ないので、仲々未開どころのことではなかつた筈であります。これは壁書を唯一の史料としての考證である。

## 第二例。

スويس共和国の建設は何時であつたかといふことは、唯一通の古文書に基くのであります。即ちスويس共和国建設の盟約書であります。それも本書一通きりで、うつしも何も無いものであります。思へば不思議にもかやうなものが残つて居たのである。百餘年前までシュウィツの記録倉に秘藏されて居つて、建國の初より五百年間、全く誰も知らななものでありまして、又スويس共和国の古文書にも古記録にも、かやうなる盟約がその頃あつたのであるといふことは、一向あがつて居らんのである、況して外國の古文書なり記録なりに全く想像も致してあることではありません、それには畢竟いろ／＼意味あひのあることでありまして、しらべて見れば實は怪し



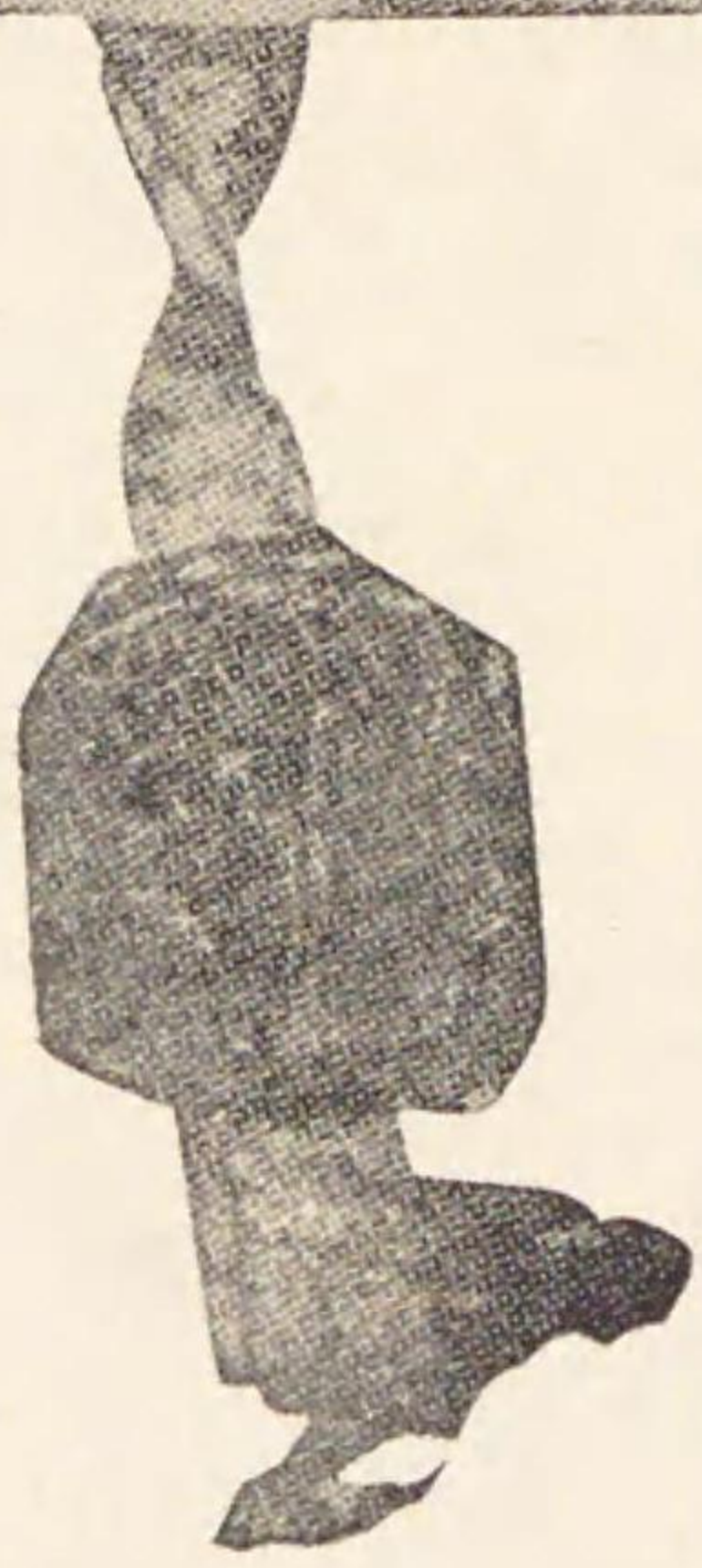
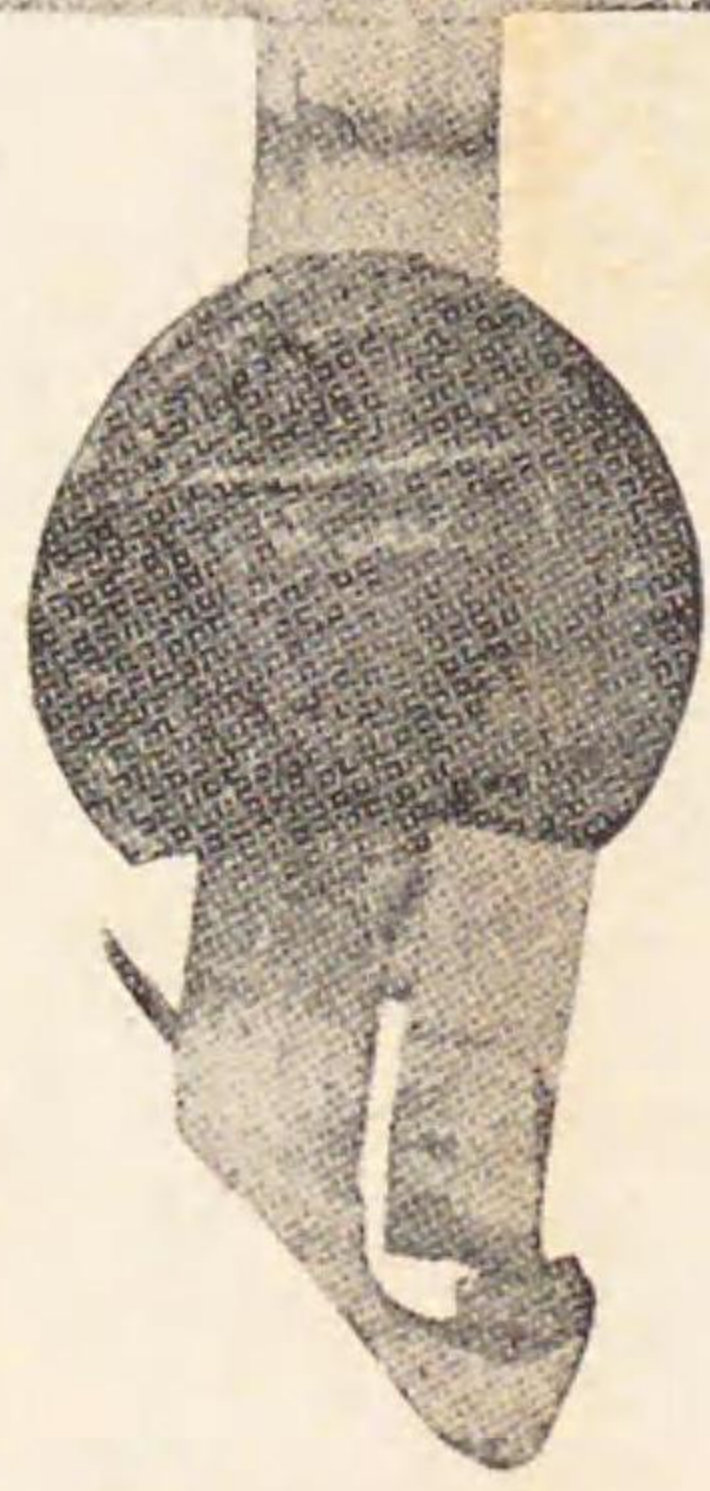
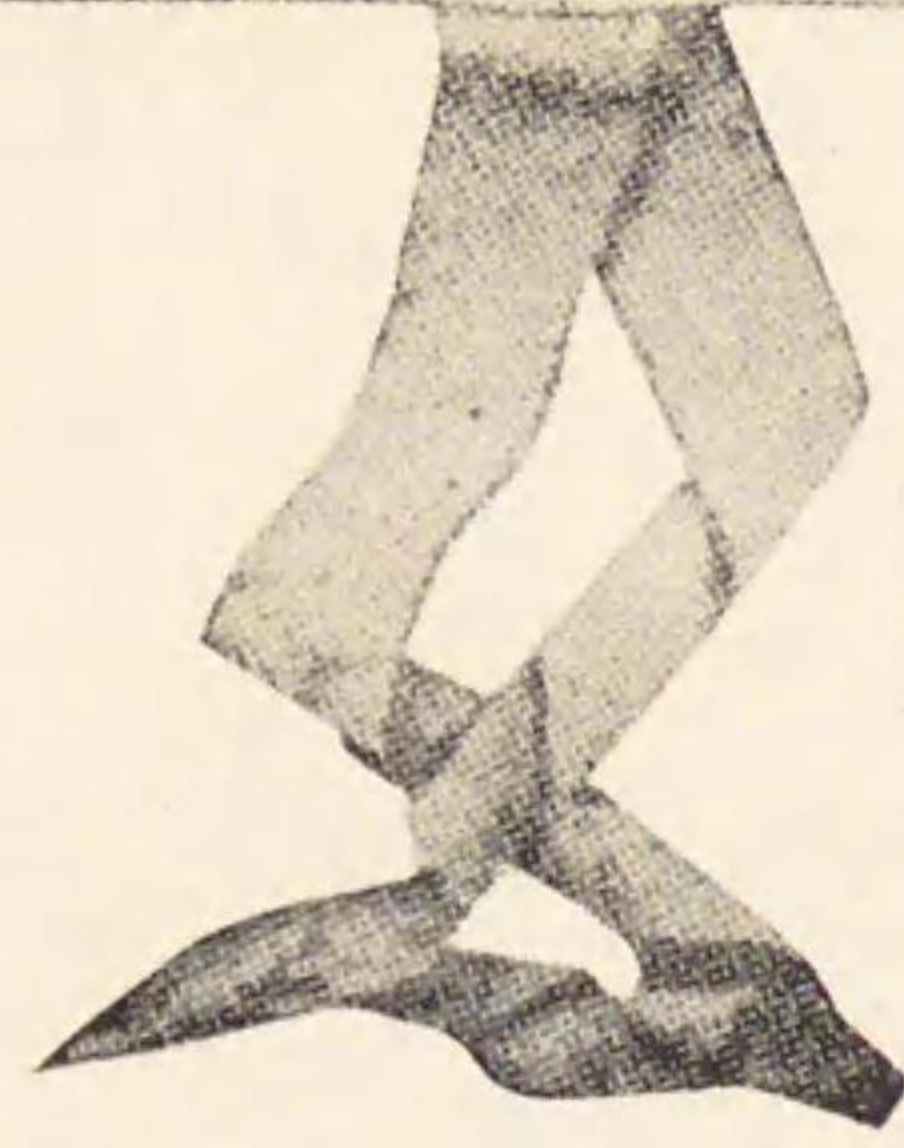
むに足らぬことであるですが、はじめてこの古文書を見つけ出したときには、當時の人がどんなにまで驚いたか、殆んど今日より考へ付きませぬのであります。

この古文書は千二百九十一年八月初日附でありまして、シウウィツ、ウリ、ウンテルワルデンの三地方が同盟致しまして、自分等の地方がオーストリア家の家領として吞まれてしまひません様に自立を圖りました宣言書であります。この宣言書が何故にかやうに一通のう、つしをも取らず、極めて秘密に保存せられまして、事に與かりましたものも、亦重大の國事と心得、堅く秘密を守り、誰にも口外致さなかつたものと見をまして、上に申す通り本國の古文書や記録などにも一向この秘密を漏洩してないのであります。

當時のこの三州の要路の人々が、かくまで堅く秘密を守りました重なる理由は、畢竟オーストリア家の勢威を憚りまして、未然に發表しましては事のやぶれを招くことと慮つたことであるに違ひない。この千二百九十一年八月初日と申すのは、その他の點に於ても注意を要する日であります。と申すのは、神聖ローマ帝ロドルフ一世は、この年七月十五日を以てかくれられました。その嗣子アルベルトに帝位を繼がしめられる運びにも行かなかつたのであります。然るところアルベルトといふ人は、仲々の豪傑でありまして、機會を外さずオーストリア家の家領をひろげ勢威を奮つたのみならず、政治向にも非常に老熟の人でありましたから、シウウィツ等三州の面々



Handwritten Latin text in a medieval script, likely a legal or historical document. The text is dense and covers most of the page area.



この秘密を漏洩してないのであります。

當時のこの三州の要路の人々が、かくまで堅く秘密を守りました重なる理由は、畢竟オーストリア家の勢威を憚りまして、未然に発表しましては事のやぶれを招くことと慮つたことであるに違ひない。この千二百九十一年八月初日と申すのは、その他の點に於ても注意を要する日であります。と申すのは、神聖ローマ帝ロドルフ一世は、この年七月十五日を以てかくれられて、その嗣子アルベルトに帝位を繼がしめられる運びにも行かなかつたのであります。然るところアルベルトといふ人は、仲々の豪傑でありまして、機會を外さずオーストリア家の家領をひろげ勢威を奮つたのみならず、政治向にも非常に老熟の人でありましたから、シウウィツ等三州の面々



が、何れも皆小さくなつて潜んで居つたのも無理ならぬ次第であります。千二百九十八年に至りまして、遂にアルベルトが皇帝になられた、かやうになりますと、従前のオーストリア公アルベルトよりも皇帝アルベルトは尙こわいからして、一層小さくなつて秘密の露顯せぬやうに力めたことは明白なことであります。これがスイス共和國建設の盟約書即ち宣言書が秘密に葬られて百餘年前まで人に知られなんだ原因であります。

然るに千三百八年に、皇帝アルベルトは害に遭ひ、續いて神聖ローマ帝國に内亂が始まりました、千三百十四年に至りまして、バワリア公ルイス、帝位に即かれましたので、三州の者共は始めて息を吐きまして、オーストリア家を相手取つて、公けに打つて出まして、千三百十五年十一月十五日に、モルガルテンに於て大にオーストリアの大軍を破りまして以來、スイス共和國は最早オーストリアを憚からず、更に宣言書を緻密にして發表しましたから、前の秘密宣言書は、申さば、發表する必要がなくなつたのであります。自然立消え同様の姿で、ひどい言葉を使ひまするならば、反古同様になつてしまつたと申してもよいのであります。それ故に唯鄭重に保管して居つたゞけで、別にうづしも取らず、まして印刷は尙せず、後世に至つてしまつたのであります。

スイス共和國の建設の次第につきましては、この六十年以來、スイスの史家がそれ／＼骨を



折りまして、教育社會の手合から烈しい攻撃を受けるにも拘はらず、着々と科學的調査を致しましたので、今では建國の手續が明白に決定致してあります。で、千八百九十一年八月一日に、はじめて建國六百年の大祭を執行致したことであります。かやうにスウイスの國家が、建國の月日を公けに認めるまでに確定致したのは、種々の研究の結果であります。随つて三百年來行はれて居りました荒誕不稽の傳説雜説が一掃に追ひ散らされまして、まじめな書籍に上らぬやうになりましたのであります。

唯一通の古文書で、これほどはげしい影響を一の國の國史に與へました例證は甚だ乏しいことでありまして、差詰この場合などが、其の最も著しいものでありませう。よつて茲にはその寫真圖面をあげまして、いかやうの形式のものかといふことを御目にかけて、併せてヨーロッパ古文書の一標本と致します。これは古文書を唯一史料としての考へであります。

第三例。

正慶元年即ち元弘二年の年末に、大塔宮護良親王は、山崎街道を攝津國より進軍して、山崎を占領致されまして、京都の咽喉を斷ち切らうと計畫されました。このことは宮の作戰計畫の廣大なることを證明致しまするもので、他のことより綜合致しますれば、たしかに楠木正成の畫策で

あると認めます。この事實は唯一通の古文書によつてわかることでありまして、やはり重大の事實を、唯一通の古文書が證明致す場合であるのである。

この古文書は手紙でありますが、日靜と申す坊様が、誰に宛てましたが宛名のところは破れて居りまして見えませんが、日附はたしかに残つて居りまして、十二月十六日附であります。上總の茂原町藻原寺に保存してありまして、裏に金綱集と申すお經が書いてあります。よつて普通にこれを金綱集裏書と申しまするものゝ中の一つであります。何様經卷として製本しまする時分に、裾の方を裁ち切りましたから、一字乃至二字位づゝ裾の方が切れて居りまして、讀めません文字が出来て居りますが、大體に於ては明白に意味がわかります。始めは破れてございませんが、とにかく長い手紙でありましていろいろのことが書いてあります。が、こゝには本題に關係しまするところだけを抜いて御目に懸けませう。

(前) 九日より京中以外騒動候、(阿賀カ) 白河に朝敵充滿し山崎(定カ) せめいり候間、(宇津カ) 赤松入道賜打手早速追返候了、(仍カ) 仁定寺に構城櫛引籠候を宇津宮つゝいて責取即昨日(十五) 打落頸其數令持參候是、大塔殿御所爲と申之、其外京中處々にて日々被召取人數難及言語候、(下) これも古文書を唯一史料としての考證であります。

第四例。



同じく大塔宮の御事蹟で、第三例と多少關聯して居ります事であるが、宮が同年の夏、熊野を根據地として伊勢に討ち入られました。そのことは花園天皇の宸記に出て居ります。例の具注曆の行の間に御書きになつて居りますので、甚だ簡單の御記載であるのですが、要領だけはわかりますから、必要の分だけ抜萃して御目につけませう。

自熊野山執進大塔宮令旨相遷當山旨云々 ○正慶元年六月六日條裡書

宜陽門院御忌日佛事如何不向六條院世間不靜之故也大塔宮等隱居京中旨風聞仍武家（抄） （後） （經） （國） （子）

云々 依是所々多喧嘩云々 ○同八日條

傳聞伊勢國有梟惡之輩成烏合之衆追捕所々其勢甚多云々 仍武家差使者令實檢云々 ○同廿六日條

勢州凶徒尙以興盛旨風聞或云合戰地頭等多被誅戮之後引退云々 ○二十日條

武家差檢使上洛申詞不違風聞之說凶徒合戰之間在家多燒拂地頭兩三人被打取守護代家所被燒

了其後凶徒等引退了云々是自熊野山帶大塔宮令旨竹原八郎入道爲大將軍襲來云々驚歎不少 ○二十九日條

これは記録を唯一史料としての考證であります。

### 史料の整理

上に申述べましたところで、考證致しまする心得かたの概略を述べましたつもりであります。勿論精密に致しまするならば、各種類の史料につきまして、一々實例を擧げまして、その批判の仕方から分析の仕方から逐一申述べなければならぬ譯でありますけれども、簡單を旨と致しまする故に、これで止めて置きます。さうしますると、次には批判の已に済みました分を整理致しまする必要が起ります。

批判まで済みました分と申せば、全く里もわかりましたし、經歷もわかりましたし、性質もわかりました人物を、それ／＼適任と考へまする要務に任用致しまするのと類似のことでありまして、この上は少しの疑惑をも持つて居りませんで、全く委任致しまして、それ／＼用を辨じさせる覺悟であるのであります。

そこで、あるひは時代別、あるひは場所わけ、あるひは事柄わけ等に種別致しまして、引出しまする便利を圖る次第でありまして、最も輕便なる致しかたは、史料一品毎にばら紙（かみ）に書き上げまして、假綴（かりぞじ）に致して置くのであります。さう致して置きますと、證據物件として喚び出しまする時分に、いかやうとも勝手の類別がつかます。

類別の仕方の中で、最も手近で最も用をなしまするのは、所謂時代別でありまして、この出來上りました整理の結果を編年史料と申します。何か研究問題を定めまして取調を致して居りまするときに



は、事柄別も中々便益でありますが、この場合におきましては編年史料より本題に關係致しまする部分を抜き出しまして、それだけを一纏めに致すのであります。強いてこれに名をつけますならば本末史料と申すべきでありませう。又一地方の歴史を研究致しまする時分には、場所別の整理がります。この場合におきまして、やはり編年史料より目的の地方に關聯致して居ります史料を選び出しまして、一纏めと致しまするのであります。出來上りましたものは、地方史料であります。何れにしても、御覽の通り編年史料が皆基礎となるのであります。されば編年史料は、申さば史料の臺帳であります。

編年なり本末なり地方なりの差別を問ひませず、整理致しましたる史料を總稱致しまして、單に史料と申します例であります。帝國大學の大日本史料と申すものに史料と云つてありますのは、この意味であります。即ち本邦關係の編年史料と申す意味であるのです。それ故に事の是非とか曲直とか申す方面の觀察は、少しもしてありませず、又推論などは尙更のこと、一つも致してございせん。綱文と申して、何箇條かの史料の要點の様なものゝが擧がつて居りますが、これは本來史料には無くて宜しいものであるが、研究者の便をはかりまして、先づ索引同様のつもりで置いてあると見受けられます。

この整理致しましたる史料さへ出來てしまひますれば、考證は、その目的を達したのであります。

これよりさき愈々歴史の編纂に取り懸かる筈であります。編纂に取り懸かりますには、仲々容易でないと申すことは、このあたゝの順序をそれ〴〵踏みまして、一品といへども<sup>ゆるがせ</sup>忽諸に致しませず、町寧に取調べまして、遂に茲に至るのであると申すことを篤と御記憶を願ひたいのである。考證編は先づこれで終へたと致しまして、次に史論編にうつります。



## 四 史論編

### 總論

こゝに史論編と申しましたのは、考證編の例に倣ひまして通俗の言葉を用ひましたのでございまして、正しく申しますならば解説編と致すのが宜しいのでございします。解説と申すのは、個々ばら／＼に得ましたところの已に證明せられました事實を取揃へまして、その互の關係を篤と取調べまして、いかやうにばら／＼と見える事實が、實際聯絡致して居るのであるか、聯絡をつけました上には、一纏まりとなして全體がどういふ事實を示して居るか、國家なり社會なりの發展の上におきまして、いかやうなる徑路を現はして居りますか、この邊を審査致すことであります。かくの如く國家なり社會なりの發展の徑路が都合よくあらはれて参りますならば、これより推しまして未來の發展の筋路をも大凡豫察することが出來ます。

無論活物でありまする國家なり社會なりのことでありまするで、いつ何時、いかやうなる變動が起きて來るかわからず、周圍の事情よりしていかやうなる影響を蒙むるかわからず實に非常なる複雑なものでありまするがために、未來の筋路を豫察すると申すのは、殆んど空想に近い姿でございしまする

けれども、とにかくだしの、ぬげにひどい變化を致すと申すことは活物と致して國家なり社會なりがなすべきことではありません。故に大凡だけならば、未然のことながら筋路を豫想することが出來ると申上げるのである。しかし兼々申上げる通り、何様非常に大膽なことでありまするで、史家は豫想を致すことは甚だ好まぬのでありまして、ひどく強いられますれば已むことを得ず條件を設けまして、需めに應じて豫想致すこともございませう。

史學を實地に應用致しまする政治家の如きは、常に國家なり社會なりの未然の徑路を豫想致しまして畫策致すのである、所謂政治家の經綸と申すことはこれに外ならぬのであります。随つて史學の心得がなくつて政治の出來やう筈がないのでありまして、先年ある席におきまして、故大隈侯爵がこの邊につきまして、いたく世の政治家に警戒されたことがあると聞きますが、まことに御もつとも御説と申すより外はありません。しかし何様申上げる通り大膽至極危險至極の豫想でありまするで、存外はづれることもあり、うちのことである、はづれた場合には大失敗なので、實にこわいことである、場合によりましては大に國家をあやまり、大に社會を害ひます。それ故にかいなでの政治家は、眼のさきだけの仕事よりやり得ぬので、所謂經綸など申すことは、あたまに少しもないのである。とにかく史學の心得なくして、猥りに經綸をやらせましては大變であります。かやうな人々は、むしろあたまから經綸など申すことは、我等の力及ばざるところである、我等は唯小さくなつて、その日だけ



の仕事をする人物であると、あからさまに仰られた方が無事でありませう。

應用の一端に就いて今申上げたのであつたが、そのことは別問題と致しまして、さて解説、即ち史論をどういふ風にして致すのであるかといふことを、これから申述べて参ります。

史論を致しまするにも、やはり考證を致すのと同じやうに、それ〴〵面倒な手續のございますこととで、決して煙草を吹かしながら空想をめぐらして推論の出来ることではありませんのです。第一上にも申述べました如き個々〴〵の事實を、どういふ風に排列して見たならば聯絡がつくであらうかといふことを工夫致さんければなりません。この手續を解釋と申します。次ではどういふ風に個々〴〵の事實を組み合はせますれば、大勢があらはれて参るであらうか、表面にはいろ〴〵様々な小さい事どもが千状萬態の姿であらはれて居るが、いかにせばその底に潜んで居る大事實を露出することが出来るであらうか、この邊のことを考へ出さねばなりません。この手續を綜合と申します。更に之に次ぎましては、化石同様に形骸だけより残つて居りません事實を、いかにしてか働かせて見ねばなりません、言葉を換へていへば、化石となつて居るものを、もとの生きて居る動物にかへしまして、それが動き、働らき、衰へ、死にまする實況を工夫して出さんければなりません。この手續を復活と申します。

その上に、まだ手續がいります。いかなる史學事項といへども、國家なり社會なりの中に、起り

ましたる現象であります。國家なり社會なりの發展に對しまして、どういふ位置を占めて居るものであらうか、その國家全體に及ぼす影響はどうであつたらうか、その社會全體に及ぼすところの勢力は、どの位であつたらうか、あるひは一時のことであつて、やがては勢力がうつりかはつて、他のものになつてしまつたであらうか、あるひは數百年後までも勢力として生存して居つたであらうか、この邊の調査をやつて見なければなりません。こゝらあたりに至りますと、問題が非常に深遠になつて参りました、殆んど哲學に接近するやうになります、即ち史學と哲學との聯絡點は茲にあります。それ故に哲學の方面よりも手を出しまして、かくの如き深遠の問題に啄を容れることもございします。又史家の希望と致しましても、どうか哲學の方面よりこの深遠の部分に向ひまして、應分の力を注いで戴きたいものである。

大體にわたりましたことはこれだけで済んだことと致しまして、次には上に申上げましたいろ〴〵の手續につきまして、それ〴〵お話をして参りませう。

## 解 釋

解釋と申すのはどういふことであるかといふことは、總論に於て説明致しました故に、茲に於てあ



らためて申す必要はないが、要するに解釋といふことは、材料を集めざる時からして、多少已に  
ることであります。大凡一つの材料を得まして、それが果して材料になるであらうか、どうか知ら  
うと思ひますれば、多少ともその材料が教へてくれます事實を考へなければなりません。もつとも  
委しいことは考證編がやつてくれますけれども、材料編におきましても、一通りのしらべはいること  
である。縦令改<sup>よし</sup>ためてしらべると致しませんが、不知不識の間に實際は多少のしらべを致すのであ  
ります。史家のあた<sup>ま</sup>は數多の智識が已にはいつて居りますので、故らに注意してやらすとも、材  
料を一見しますれば、自然あた<sup>ま</sup>にある智識と、前に出て來た材料との聯絡を、知らず識らずにつけ  
ます。これが已に解釋であります。まして考證編に申した批判など申すことに至れば、明らかに解  
釋を施しつゝありまして、場合によりますれば、随分深い所まで解釋をつけるのであります。極めて  
むつかしい贋物の場合などに至りますると、史家は随分緻密な解釋を施してかゝらんければ批判はつ  
きません。よつて史論編に至りまして、始めて解釋といふことを新たに擔ぎ出すのであります。實  
際は夙<sup>は</sup>くよりやつて居ること、史論編では解釋に就いての心得かたを、あらためて申上げるに過ぎ  
ぬのである。

解釋するに就きまして、最も重大な心得かたは、考證編を経まして確定致して居ります事實が、  
何れも人爲の證據物によつて成立つて居るものであります故に、一品毎に皆多少趣を變へて居るも

のと見なければなりません。社會の人間は毎々申上げる通り、一の時代におきまして大同小異の思想  
を持つて居るものであるですけれども、それは平均の話であつて、一人一人をとつつかまへて見れば千  
差萬別であるが如く、個々ばら／＼の事實は、やはり千差萬別の状態をあらはして居るものと假定せ  
んければなりません。決して平均をとりました、それから推しましたところの理窟で、演繹法によ  
りまして、あた<sup>ま</sup>から推論して參る譯には參りません。これが解釋の難い所以でありまして、一品毎  
にその特別の性質を取調べなければなりません。

例によりまして、極く簡單なる場合、即ち書籍によつて得ましたる事實で申しますならば、その  
證據物件の製作年代に固有なる社會の事情を、あらかじめ承知せなければなりません。製作場所に固  
有であります社會の状態を心得て置かんければなりません。又製作者の人物がどういふ風になつて  
居つて、同年代の平均人物とはどういふ風に變つて居る、あるひは場合によりましては、數多の時代  
を通じまして一向類例のないやうな人物ではありはしまいか、その邊のことも念の爲めに考へねば  
ならず、随分込み入った困つたことが出て參ります。

極く手短かなところを申したところで、言語は人々によつて大分違ふことがあります。人により  
ましては同時代に普通に行はれて居りまする言葉を用ひませんで、自分自儘の言葉をつかふことがご  
ざいます。即ち同時代の人にもわからん筈の文章を綴ることがございます。又書き方に於ても左



様でして、同時代の人が呆れるやうな文字をつかふ人があり兼ねません。大久保忠教などはこの類の人物の一人でありまして、實に奇怪千萬な文章を書きます、奇態な漢字をつかひます、又不思議な假字遣ひを致します、鳥渡見ますれば殆んど合點のゆかぬやうなものを書く人でありますが、段々しらべて見ますれば、これも左程奇態ではなくなつて、やはり解釋はつくのである。即ち室町時代より江戸時代の始めに至りまするまで、坊様達がかひつけて居りまする一種の妙な漢字をつかふのでありまして、決して大久保の新發明ではございません。但し普通の濁點の代りに三點をうちまするのはこの人の新案かと思はれます。この類の人が随分何れの時代にもありかねないことでありますので、一々しらべを要するのであります。當時の社會におきまして普通に用ひて居りまする意味によりまして、同時代のすべての書類を讀まうと致しますることは、それ故に無理な仕業となるのであります。幸にこの類の人物は何れの時代におきまして、さうざらにあるものではございませんので、普通の人々は同時代の平均の言葉を用ひて居りまするで、多分はその時代平均の事情を標準と致しまして解釋して宜しいのである。どうかすると時々除外例が出て參りまして、特に史家に面倒をかけることがあるのであります。

古文書に至りますると、一般書籍と違ひまして、この除外例が随分多いので、申さば殆んど人々家々によりまして、特色があると心得て居つても宜しい位である。それはどういふことかと申すと、家

によりまして流暢なる文章をかくうちもあれば拮据な字句をつらねる人もあります。又書風よりして申すならば、奇骨のある能書で書いてあるのもあれば、少しも生氣のない活字同様の書風でかく例の家もあります。それ故に古文書の解釋は、記録の解釋よりも困難であります。

文章や用語や書風だけのことで云ひましても、これだけの困難が已にあるのですからして、それより以上のことになりましたれば益解釋がむつかしくなつて參ります。これを要するに、學識が深ければ深い程、解釋は誤らぬのに近いのでありまして、未熟な考で迂濶に解釋するのは、實に危険至極であります。

物品などに至りまするといふと、解釋は書類よりは一層厄介なのでありまして、随分あたたまの鍊れました人でも間違ひをやり勝ちのことなであります。物品の場合でありますれば、先づ以てひろく品物を揃へんければなりません。然るところが、同一類の品物を揃へると申すことは、いふに易くして行はれぬことであります。と申すのは、問題に上つて居りまするところの物品が、いづくにあるか、先づさがし出さんければなりません。探し出さうと致しまするには、旅行も致しませんければなりません、年月も費さんければなりません、資金も費さんければなりません、唯熱心だけのことでは、到底ゆくことでありません。これが若し書類でありますならば、方々に居まする朋友に頼んでおきますれば、手紙か何かで通信致して呉れるといふことも出來ます、さう致しますれば、机の上で幾分



か集めることが出来ませんが、物品に至りましては、全くこのやり方ではいきません。文章に綴りました朋友の報告では、殆んど無益に近いのである、必らず事實に就いて見て、實地を取調べなければならんことでありまして、畢竟その爲めに面倒がかかることであるのです。

かの銅鼓の鼓面の中央にありまする光線つきの星の様なものは何であるかといふことの解釋を付けまするのに、人々が大に困つたといふことは、この一例でありまして、光線の数が十二あるのを幾品か見ましたものが、直ちにこれは太陽の形である、十二の光線があるのは十二時間を示して居るものであるといふ様に考へまして、それより推論を致しまして、これは太陽を祭る祭器であらうといふ觀察をしたのは、これは甚だしい誤であつたが、これはひろく器物を集めませんから、かやうな誤が出て參つたのであります。

又同じ様な例であるが、本邦の古墳からして、まゝ何百となく出て參りまする曲玉でありまするが、あの曲玉に穴が明いて居る。紐を通す爲めの穴であるですが、この穴が通常圓錐状になつて居る。それと申すのは、何様堅い石材を選りまして、甚だ粗末な錐を以て穴を明けたのでありませうで、兩側から錐をもみ込んだ自然の結果は、圓錐の頂點をならべまして、中央の軸が一線となるやうに致した風の穴になつて居りまする。これよりして推しまして、曲玉の穴は必らずかういふ風な形であるべきものである、若し之にはづれて居れば後世の贋造品であるといふやうな解釋をつけやすいのでありま

して、我等もかつては左様に承はつて居つたので、穴の形が眞贋の鑑定を致しまする要點の一つと心得て居つたが、先年の發見によりますれば、必らずしも左様でないので、例へば芝の丸山から出ました曲玉の中には、圓筒形の穴が明いて居るのがございます、この品は隨分考古學専門の面々を驚かした標本であると承はつて居るのである。

それ故に安心なところを申すならば、一つの類の品につきまして、あらん限り驅り集めまして、もうこの他には一品といへども残つて居る筈がないといふときになりましたして解釋を試みるのが無事なのでありませう。しかし今申上げたやうに、この上はもう残つて居る筈がないといふ程度に達するといふことは實際なことでありまして、かやうな時期の來るのを待つて居りましたならば、何百年經つても解釋をつける時は參りません。

よつて已むを得ず、不完全ながら、他日訂正致すことと覺悟致しまして、假りに解釋を致して置くより外致しかたがない。それ故に常に今月今日の程度では、かやう解釋致すといふことでありまして、これは必らずしも考古學の方の原則たるのみならず、すべての史料を解釋致しまする原則と相成るのであります。皆今月今日の知識の程度によるのである。

又更に進みまして、古傳説なんぞに至りましては、その解釋の困難なること實に大變でありまして、理屈をつけますれば、いかやうなる理屈でも附くもので、十人で理屈をつけますれば、十通りの解釋



が出来ます。つまりどの解釋が一番よいのか、まるでわけのわからんものとなります。正しく申しますならば、古傳説の解釋などは、一時代の平均智識を示しますもので、時代がかはり、平均智識が上つたり下つたり、趣がかわつたり致します度毎に、解釋が違つて参ります。

例へば書紀の神代卷に、泉津平坂よもつひらさかといふことがございませう。泉津平坂と申すのは、この顯國あろくにより泉國へ参る關門でございまして、神代卷の趣によりますれば、實際の地理の上に、かくの如き關門があつたものと太古の人々が思うて居つたこと、解釋致すより仕方がないと我等も心得て居るのであります。然るところ、古への學者達は、さういふ解釋をとりませんで、いやに理屈をこじつけて居ります。即ち「所謂泉津平坂者不復别有處所但臨死氣絶之際是之謂歟」などと申して居ります。これは畢竟神話と申すものの性質を研究したこともなければ、宗教學など申す學問を尙更以て存せんからのことで、つまり王朝漢學者の平均智識を以て、もつともと聞えるやうに理屈をつけたのであります。その他今日に至りましても神代卷を恰かも實歴史の如く解釋しやうとする一派の人々があります。この方々は、やはり王朝時代の平均智識の上より進んで居られんかと我々は見るのである。聊かにもインドとかエジプトとかギリシアとかドイツとかロシアとか南洋などに傳はつて居ります神話古傳説をおしらべになつたらば、直ぐにお目がかうと思ふのである。

實に古傳説の解釋ほど、難儀なものもございませぬ。けれども若し眞實の古傳説でありまして、時

代のわからん太古より傳はつて居るものでありますならば、その太古の時代に於ける國民の平均智識を示して居る品であります。國民心理の淵源は實に茲に存するのであります。深く研究を要する次第である。但し解釋することは非常な困難であります。例によりまして、一二の實例を挙げます。

### 第一例。

史徵墨寶考證第二編第二卷に、太田資長入道道灌が、江戸に築城しました目的に就きまして左の如く述べてあります。

江戸築城ノ初ヲ按スルニ、長祿元年澁川義鏡ノ成氏征討トシテ東下ノ時、義鏡ハ武藏蕨城ニ居リ、持朝ハ川越ニ、資清ハ岩付ニ、資長ハ江戸ニ、同時築城セシ事、鎌倉大艸紙ニ見エタレハ四城联接シテ武藏ヲ横斷シ、以テ成氏ヲ拒キシナリ、而シテ永享記、小田原記諸書ニ、或ハ靈夢ノ告ニ依テ之ヲ創ストシ、或ハ九城魚ノ祥ニ因リテ、江戸、川越、岩付、鉢形等ノ九城ヲ築クトスルハ皆妄誕トス、又落穂集ニ其地ヲ千代田、寶田、祝田ノ三村トシ、關東古戦録ニハ千代田等ヲ築造奉行ノ姓氏トス、因テ又千代田城等ノ目アレハ、其事確據ナシ、徳川氏開府ノ後、好事者之ヲ祥瑞ニ託セシノミ、初ヨリ江戸城ト稱セシ事、梅花無盡藏、江亭記等徵スヘシ、或ハ略シテ江城ト稱シ、長狀、橋場、總泉寺文書又平河城ト稱ス、平河天、天神札其地ハ江戸太郎重長ノ館址ナリト云フ。



こゝに見えて居る持朝は上杉扇谷持朝で、資清は道灌の父であります。鎌倉大艸紙によりまして、足利成氏をふせぐ爲めの城塞の一つであると致しましたは、至極もつともな解釋で、地理上いかにもさう思はれます。當時は利根川が今と違ひまして、川俣より今の會ノ川、古利根川、古隅田川に沿ふて南流しまして、海に入つたのであります。恰かも上におげてあります城塞四箇所の天然の外濠となりします。後に太閤秀吉の指圖で、徳川家康が居城しましたときの目的とは全く違つて居ります。

## 第二例。

茲に日本靈異記と略して申す古書があります。もとよりつくり話でありますが、とにかく表題の通り佛教の靈異を信者に吹き込む爲めにつくつたもので、決して當時の社會を冷罵するつもりではありません。この書は弘仁年間に、奈良の藥師寺の僧景戒の書いて置きましたもので、奈良朝の末より王朝の初めにかけての社會の實相を窺ふのに恰好の史料であります。この書に出て居る話を、一つ御披露いたしませう。

## 閻羅王使鬼得所召人之賂以免縁第廿四

檜磐島者諾樂左京六條五坊人也居住于大安寺之西里聖武天皇世借其大安寺修多羅分錢卅貫以往於越前之都魯鹿津而交易以之運超載船將來家之時忽然得病思留船單獨來家借馬乘來至于近江高

島郡磯鹿幸前而睞之者三人追來後程一町許至于山代宇治崎之時近追附共副往磐島問之何往人耶答言曰閻羅王闕召於檜磐島之往使也磐島聞問見召者我也何故召耶使鬼答言我等先往汝家而問之答曰商往未來故至於津而求當相欲捉之者有四王使詭言可免受寺交易錢而奉商故々暫免耳召汝累日而我飢疲若有食物耶磐島云唯有干飯與之令食使鬼云汝病我氣故不依近而但莫恐終望於家備食饗之鬼云我嗜牛臭味故牛宍饗捕牛鬼者我也盤島云我家有斑牛二頭以之進故唯免我也鬼言我今汝物多得食其恩幸故今免汝者我入重罪持鐵杖應所打百段若有與汝同年之人耶磐島答言我都不知三鬼之中一鬼議言汝何年耶磐島答云我年戊寅也鬼云吾聞牽川社許相八封讀與汝同有戊寅年人宜汝替者召將彼人唯汝饗受牛一頭也爲令脫我所打之罪呼我三名奉讀金剛般若經百卷一名高佐麻呂二名中知麻呂三名槌麻呂夜半出去明日見之牛一死也磐島參入大安寺南塔院請沙彌仁耀法師未受戒三時也語欲奉讀金剛般若經百卷仁耀受請經二箇日讀金剛般若經百卷訖歷三箇日使鬼來云依大乘力脫百段罪自常食復倍飯一斗而賜喜貴自今以後每節爲我修福供養即忽然失磐島年九十餘歲而死大唐徳玄被般若力脫閻羅王使所召之難日本磐島受寺商錢脫閻羅王使鬼追召之難也賣花女人生切利天供毒掬多返生善心者其斯謂之矣

御覽の通り聖武天皇の御代の話となつて居るので、その頃の大寺と實業家との關係、それから坊様たちの佛教弘通くわつうの手段、當時の社會の理想などが、極めて赤裸に述べてありますので、非常に



面白いのである。改めて我等が言葉を費しませずとも、讀者は一讀して御銘々に適當に解釋なされることが出来るであります。聖武天皇の御代は、佛教の勢力が始めて大に日本の社會に及んだ時でありますので、かやうな社會の實相を現したのであります。

すべて新しい宗教が、はじめて一つの國民にゆきわたりましたときには、似寄りの社會の實相をあらはすものでありまして、ヨーロッパにおきましても、同じ様な事實があらはれて居ります。

例へはランゴバルド人が、イタリアの北部に國を興して、段々南下しやうと致しまする頃に、はじめてキリスト教を奉じまして、非常に熱心の信者となりましたが、それと同じ様に、フランス人もフランスに國を建てまして後、キリスト教の感化をうけまして、殆んど呆るゝばかりの熱心をこの信仰に注いだのであります。ローマの城外にカタコンベと申して、地盤の下に鑛山の樋のやうに、三重にも五重にも地の中をくり抜きまして、その穴の兩側に横穴を何重にも掘りまして、澤山な人々を埋葬する共同墓地があります。

このカタコンベは、史料として餘程面白いものであるが、今はそのことは申述べぬが、とにかくローマ時代の、即ち四世紀以前のキリスト教徒の共同墓地であるのですから、信仰の爲めに一命を棄てました、かの所謂マルチレスの遺骨なども、随分中に交つて居つたのである。こ

の頃までのローマの僧正の墳墓なども、この中にあります。そこでその頃のキリスト教におきましては、有名なる信徒の遺骨をば、何より尊い遺物と心得ましたので、寺に恭しく安置致しまして信者に參拜せしめたのであります。即ち賽錢を吸收する最も大切の道具であつたのです。随つて莫大な價格なものでありまして、有名なる信徒の一片の骨は數千金を價しました。

そこでランゴバルド人等は、熱心の信徒たるに拘はらず、何よりの金儲け仕事と心得まして、このカタコンベを一種の金鑛同様に取扱ひまして盛に古骨を輸出致しました。その輸出先はヨーロッパ全體であるが、殊にフランク人が有難がつて買ひ入れましたもので、何某の骨と云つて最も有難い人の名をくつつければよいのですから、出鱈目出放題な高僧の名をこれにくつつけて、勿體なさうにこの骨を開張しました。さうしますると有難連中の集まること大變で、一開張の賽錢が、あまり仰山なので手では集めきれぬので、ぢれんでさらつたといふ話があります。勿論誇張は澤山ありますが、いくらか事實もあらうと思はれます。随つていろ／＼の詐偽話もあるし、地獄談もあるし、馬鹿馬鹿しいことが澤山ございしますが、まさか上にひきましたやうなひどい話はございません。

奈良朝の盛時より王朝の初めに至りまする本邦の社會の實況は、今日流行の言葉で申すならば、腐敗を極めて、蛆が澤山わいて居つた姿で、實に呆れるより外ございせん。久米邦武博士の古文



書學講義の第二節、古の財産を辨すと題する章を御讀みになると、上にひきました話は、決して偽でないことがよくわかります。

## 綜 合

解釋が已に済みましたれば、次の題として解釋の済みましたばら／＼の事實を、尙精密にしらべることでありますが、解釋のところ已に多少の連絡をつけて置いたでありますので、全くちり／＼ばら／＼にはなつて居らるのであります。とにかくまだよく取り纏めまして、一組の事實とはなつて居らるのであるからして、これをよく取り纏め組み合はせまして、成るべく一組の大きな事實に纏めなければなりません。尙進んでこの一組の事實の底に、いかやうなる大事實が潜んで居はしまいか、深く注意を要するのである。

この術を施しますには、第一に學術的直覺がいます。學術的直覺と申すのは、學問上の機轉でありまして、練習をしませんものには頓と心づかぬことを、一見して注意することでもあります。所謂眼光紙背に透るとか行の間を讀むとか申すのはこのことを申すので、つまり何の學問にも必要なことであるのであります。極く手近な一例を申すならば、かのニートンが熟したる林檎おのづの自から地

へ落ちるのを見まして、林檎りんごが自から地に落ちるのでない、大地が林檎を引き落とすのであると解釋致しまして、これと同じわけで、もろ／＼の遊星は皆太陽に引き落とされやうとして居るのであらうといふ様に考へ附かれた。即ち林檎の地に落ちると申す事實の解釋より、はじめて遊星が太陽に引きつけられることを綜合せられたのであります。かやうにして一旦案が立ちますれば、あとは樂らくなのであります。

史學の解釋綜合におきましてもこの通りでありまして、うまいところに氣が附かぬといかんであります。これには熟練を要します、又いかに熟練致したからとても、誰にでも必らず出來るといふ御うけあひは出來かねます、ある程度までは特別の才が無くてはいけません。かやうな次第でありますので、綜合の手續をこまかく申上げやうと思ひましても、とても出來ません。よつて實例を御話致しまするからして、よく御熟讀になつて漸々御練習になる様に願ひたい。

### 第一例。

すべて戦史は比較的單純の研究手續で済むものでありますが、中には史料の缺乏の爲め、又は史料の區々まちまちなる爲めに、さつぱり真相がわかり兼ねます事があるです。かういふ場合には、古戰場と申す實際の地理を、一等史料と致しまして、それに當時の戦術はいかやうなものであるかといふことをしらべまして、これを二等史料と致しまして、更にその時の主將なり參謀長なりの人物を



穿鑿致しまして、その人々の畫策しさうなことを考へまして、これを五等と致しまして、普通に傳はつて居りまする史料を六等乃至七等と見まして、説を立てて參るのである。かやうなむづかしい戦史の場合は、本邦には出て來ぬやうですが、ヨーロッパにはございます。

史學雜誌第七編の七、九、十の三號にわたりまして載つて居りまする箕作元八氏のゼンバハ戦争の真相と題しまする論説は、よほどむづかしい綜合でありまするで、戦史の考證と致しましては、先づ極めて困難なる場合の好適例でありまする、就いて御覽になるやうに願ひたい。又我等が曾て述べましたモルガルテンの戦と題する論説は、同雜誌第八編の九、十二、第九編の五の三號に跨つて載つて居りますが、これも非常に複雑なる戦史の考證で、史料の殘缺して居ること、又その説の區々なること、よいものがあるかと思ふと、ひどく年代が下つて居つたり、古文書はといへば、たつた一通しかなし、實に困る場合でありまして、その困難なることは、決してゼンバハの戦の考證に譲らぬのであります。又考證の結果はどうなるかといふと、オーストリア軍がシュウイツ、ウリ、ウンテルワルデンの三州を包圍攻撃しやうといふ作戰計畫でありましたので、不幸にもモルガルテンに於て最先に大打撃を受けまして、切角の計畫が水泡に歸してしまつたといふ大事實をあらはしまする。随つて普通に傳へて居るところのモルガルテンの戦に關する説とは、大變に違つてしまひまする。これも綜合のよい適例の一つでありまするで、就いて御覽を願ひたい。

この二つは戦史の方の綜合の適例となるものである。

### 第二例。

久米邦武博士の明經學の政治に於ける結果と申す論説が、史學雜誌の第九編の十二、第十編の一、二の三號に互りまして載つて居りますが、よくばら／＼の事實を解釋致されまして、これを一組のものとして考へつかれて、その底に潜まつて居る社會の大勢を露出されて居りまする。これは餘程面白い實例でありまするで、就いて御讀みになることを願ひたい。

### 第三例。

ヒルト博士のヴォルガフンネン及匈奴考と題せる論説が、史學雜誌の第十一編の八、九の二號に續いて載つて居りまする。ヒルト博士の説は、よく事實にかなつて居るか、どうかは別問題と致しまして、綜合の實例と致しましては、まことに屈竟の適例でありまする。これも雜誌に就いて御精讀になるやうに願ひます。

この外に尙材料編に載せました銅鼓の説を、綜合の適例として御讀みになるも宜しうございませう。どうせ綜合の手續をくわしく申上げやうと思ひましても、實際出来ることでないのでありまするで、已むを得ませぬから、これに止めて置きます。



## 復活

三九四

復活と申すのは、已に申しました如くに、事實の形骸より残つて居らぬのを、いろいろ工夫致しまして、これを活かして感じさして働かして見ることであります。これには頗る想像力がいられます。想像力と申したところで、史家の想像は詩人小説家の想像とは違ひます、證據物件のゆるす限りの範圍に於ての想像でありまして、自分勝手氣儘の空想を走らせるのはございません。

想像と申すと何か空想の様に聞えますが、想像と空想とは大なる相違のあるもので、空想と申すことは全く證據も何もないことを空に考へるのであります。學術に於て申します想像とは、證據物を活かして考へることであり、即ち證據物を基礎として、その上に建てる建築である。建築ではあるが、その材料たる材木やら鐵材やら石材やら屋根瓦などは、皆實際の史料でありまして、その切組方、積方葺方だけが史家の想像であるのです。しかもこの史家の想像は決して空から出ては居りません、現在の社會から割り出してある。それ故に建築と申しても、史家が空中に建てます襖閣ではございません、屨氣樓ではないのであつて、實物を以て建てたのであるのです。

この史學の復活手續に最も近いものは、古生物學の復活手續であります。古生物學者は何萬年何

十萬年以前の化石をつかみまして、それを活かして考へるのであるのです。重大なる骨が一片ありますれば、古生物學者は動物全體を想像致します、葉の印影が一枚ありますれば、植物全體を想像致します。この方の想像もやはり屨氣樓ではございません、動物なり植物なりの重要な類別、各類別の特色、動植物全體の組織、生理などをくわしくしらべて居る人々でありますので、動物や植物が、實際に生活し、感じ、働らかうとするには、どれだけの器官機能を具へて居らねばならぬといふことが、明白でありますので、一片の骨一枚の葉を、この智識と綜合致すのである。

史家におきまして、やはり同様で、一の國の歴史の各時期の特色、その國史の大體の經路等を、あらかじめ心得て居るでありますので、過去の事實が活きて動かうといふには、どういふ條件を必要とするといふ考案は附くのであります。かくの如くにして想像致すので、何等の理屈もなしに、痴人が夢を説くのと一般の様なことを申すのではありません。

この復活のことも、やはりこまかい手續をそれ／＼申立てる譯には参りません、到底重なる實例を篤と御精讀になつて、面々が御自分で御練習なさるより外仕方がない。左に一二の實例を挙げませう。

### 第一例。

久米邦武博士の古文書學講義第廿七節天平資財の文書と題せる一篇は、復活の適例として御精讀の價があります。



## 第二例

本朝世紀天慶元年の記事に、同年十二月十五日夜の月蝕の記録が出て居ります。頗る綿密な記事でありまして、當時星學は未だ衰へて居りませんが、世間の人々のあたまには、科學に對する考が皆無であつたことは明白にわかります。この場合のみならず、他の事柄から推しましても、本邦人は昔より科學には甚だ迂遠な次第であるのです。多少科學の味を知り出したのは最近三百年この方と見うけられる、これ全くヨーロッパ文化東漸の御蔭であるのです。

十五日戊子、略<sup>○中</sup>今夜亥刻月蝕也、先是權曆博士外從五位下葛木宿禰茂經進勘文云、今年十二月

十五日戊子夜、月可蝕五分之四、強半虧初亥一分、蝕甚亥一刻三分、復未亥二刻四分、蝕所起、月

在陽曆、初起東北、甚於正北、復於西北、但十五分之四者、僅及三分之一、其蝕甚少、所謂天道

雖玄遠、而經術之妙、不差毫釐者也云々、爰時之好事者、依件勘文、通夜效驗之、毫釐無差、悉

叶勘文、當時以件茂經宿禰爲賢有識之者、○本朝世紀

上の文に、時之好事者と申し、又通夜效驗之など申してありますが、まことに呆れた話で、月蝕を觀察したものを好事者とはひどい話で、多少科學に興味を持つて居るものを、俗に所謂茶人と思つて居つたものと見える。堂々たる外記が、臆面もなく、こんな評を致すのですから、當時の世間の俗物は、科學者を何と云つたか、殆んど想像がつきません。又通夜效驗之と書いてありまするが、

通夜とは、けしからぬ誇張の言で、夜少々長おきしたのを夜通しと申したのは、朝廷の史官の言葉とも存せられぬのである。畢竟これも、科學を輕蔑する餘りから出る言葉であります。

我等の推歩するところでは、本月蝕はキリスト紀元九百三十九年一月八日夜のことでありまして、虧初は二十時五十三分、蝕甚は二十一時十六分、復圓は廿一時三十九分であります。即ちざつと九時頃から初まつて、同四十分頃に終るのであります。九時少し前から九時半少し過ぎまで、二階か何かにあがつて、月蝕を觀察するのは、一向苦勞でも何でもない話なんで、どんな早寢坊か知らんけれども、まさかこの時分に寝る奴はないでせう、それを通夜效驗之とは、無責任も甚だしいのである。當時の朝廷の史官たる外記のあたまは、かやうな粗放なものであつたと見える、國家社會のことに就いて深遠なる觀測が出来なんだのは知れ切つた話で、當時に於ては比較的にあたまの勝れてる筈の外記のやからがこんなものであつたかと思ふと、いかにも情ないのではありません。

### 第三例。

ヨーロッパの諷刺歌、本邦の落首などの類には、甚だ面白い復活があります。この部類のものには到底誇張は免かれませんが、とにかく社會の實相に基いて書いてあるに相違ありません。それ故に一時代の社會を見るには、至極の好材料であります。左に挙げますのは有名な建武の落首であります、建武元年一統の際の京都の有様を書いて餘蘊がありません。



口遊去年八月二條河原落書建武元年

此頃都ニハヤル物

夜討強盜謀論旨

召人早馬虛騷動

座頭生頭イ還俗自由出家

俄大名迷者

安塔恩賞虛軍

本領ハナル、訴訟人

文書入タル細葛

追從讒人禪律僧

下克上スル成出者

器用堪合沙汰モナク

モル、人ナキ決斷所

キツケヌ冠上ノキヌ

持モノナラハヌ笏持テ

内裏マジハリ珍ラシヤ

賢者ガホナル傳奏ハ

我モ々々トミユレドモ

巧ナリケル詐ハ

ヲロカナルニヤヲトルラム

爲中美物ニアキミチテ

マナ板烏帽ユガメツ、

氣色メキタル京侍

タソガレ時ニナリヌレバ

ウカレテアリク色好

イクソバクゾヤ數不知

内裏ヲカシト名付タル

人ノ妻輒ノウカレメハ

ヨソノ見ル目モ心地アシ

尾羽ヲユガムエセ小鷹

手ゴトニ誰モスエタレド

鳥トル事ハ更ニナシ

鉛作ノオホ刀

太刀ヨリ太コシラヘテ

前サガリニゾ指ホラス

バサラ扇ノ五骨

ヒロコシヤセ馬薄小袖

日錢ノ質ノ古具足

關東武士ノカゴ出仕

下衆上臈ノキハモナク

大口ニキル美精好

鎧直垂猶不捨

弓モ引エズ犬追物

落馬矢數ニマサリタリ

誰ヲ師匠トナケレドモ

遍クハヤル小笠懸

事新キ風情ナリ

京鎌倉ヲコキマゼテ

一座ソロハヌエセ連歌

在々所々ノ歌連歌

黠者ニナラヌ人ゾナキ

譜第非成ノ差別ナク

自由狼藉世界ナリ

犬田樂ハ關東ノ

ホロブル物ト云ナガラ

田樂ハナヲハヤルナリ

茶香十種寄合モ

鎌倉釣ニ有鹿ト

都ハイトゞ倍増ス



町コトニ立簀屋ハ  
 荒涼五間板三枚  
 幕引マハス役所鞆  
 其數シラズ滿々タリ  
 諸人ノ敷地不定  
 半作ノ家は多シ  
 去年火災ノ空地トモ  
 クワ福ニコソナリニケレ  
 適ノコル家々ハ  
 點定セラレテ置去ヌ  
 非識ノ兵仗ハヤリツ、  
 路次ノ禮儀今ハナシ  
 花山桃林サビシクテ  
 牛馬華洛ニ遍滿ス  
 四夷ヲシヅメシ鎌倉ノ  
 右大將家ノヲキテヨリ  
 只品有シ武士モミナ  
 ナメンタウニゾ今ハナル  
 朝ニ牛馬ヲ飼ナガラ  
 タニ賞アル功臣ハ  
 左右ニヲヨバヌ事ゾカシ  
 サセル忠功ナケレドモ  
 過分ノ昇進スルモアリ  
 定テ損ゾアルラント  
 仰テ信ヲトルバカリ  
 天下一統メツラシキ  
 御代ニ生レテサマ、ノ  
 事ヲミキクゾ不思議ナル  
 京童ノ口ズサミ  
 十分一ヲモウスナリ

## 第四例。

こゝに引きますのは慕景集と申して、道灌の歌集であるが、その中にこの時代の人情をうつし得て餘蘊のない歌がありますので、復活の一實例と致します。

康正元年の冬藤澤の役に至り侍敵も味方も入まじり三日をかさねていとみあらそふ事になりぬされとも屋形の武威つよくして北條憲宣上杉方のぬし終に自腹して餘兵おのかし、空しうなるあるはあたにあたりてかたみに死するも侍る時藤澤のかたへの松はらのむれにてたゝかふ男あるに中村治部少輔藤原重頼とて京家の人の世に沈て屋形に扶持せられて侍りしになんかたきの男は栗毛なる馬に乗て二引龍のほり龍の紋つけたるさしものなりけり遠目なから鎧の毛いかめし、見えけるにしはし戦ふて鎗をあはせしにめのまへにかたきの男つきとめてられてやかて中村手つから首を取て我陣に來りてかふくなんとかたりけるにいままた壯年にもたらぬ男の色白ふしてたけたかゝるへき心地したり鬢のあたりたゝならずたきしめつゝ哀もいやましあなからにくからぬ佛なり中村重頼此心はへのやさしき哥ひとつものして手向にとすゝめ侍りければその首にむかひて

かゝるときさこそいのちのおしからめかねてなき身と思ひしらすは

返し

治部少輔重頼



なき身とは誰もしれとも諸ともに今はおよふことをしそ思ふ

尙實例を捜しますれば随分ございませうが、何れともに極めて隱微の事實であるか、あるひは事實があまり大きくて到底普通の記事文では書き切れぬことであります。文面に明白に見えて居らぬことをよく考へて底を見抜きまして、これを露出するやうに致しませんければ、復活は出来ぬのであります。

## 史學の根本條件

史學は地球の表面のどこかに於て、一團の人民が社會を組織して、やがて國民となり、國家を經營して居つて、長の年月をたつ間に、段々に社會にあらはれて參つたところの種々雜多の現象を研究するものであるですから、何れも皆人間の心理作用より出ましたことであるが、この心理作用も極端に申さば時々刻々にうつりかはる周圍の事情に適應してあらはれたものである故に、いろ／＼様々の條件のもとに史學事項は出て來たものであると申すことは明白の次第である。そこで茲に申す根本條件が何箇條かあらはれて來ざるを得ないのであります。この條件の重なるものを挙げますれば、次の如きものであります。

### 第一、物理條件。

### 第二、心理條件。

#### 甲、個人心理條件。

#### 乙、社會心理條件。

#### 丙、國民心理條件。

### 第三、文化條件。

概括して申さば以上の三大條件でありまして、これが人間の心理作用を制御致しまして、自由に發展することが出来ぬやうに仕向けます。

人間はもとより我儘勝手の動物であります。勝手放題に働らき、勝手放題に我儘を致さうとしますが、何様周圍の事情が許してくれぬである。強いて周圍の事情に抵抗して、我儘を働らかうとすれば、死んでしまうからして、生存競争、適者生存の原則によりまして、自分の意を枉げて周圍の事情に屈服するものが、生き残つてゆくのである。この邊から考へて見ますれば、この周圍の事情、即ち概括して上に申上げた三箇條の根本條件は、非常に重大な勢力のものであります。この勢力の割合を正確に打算することが出来ずならば、人間の意志はある場合に於てある程度までより實行することが出来ぬことが計算出来るのであります。然るところが不幸にも心理條件なるものが非常に複



雑なものでありますので、思ふやうに打算が出来ません。しかしこれも心理學が段々に進歩致しました曉には、幾分か算盤そろばんにかけることが出来るやうになりませう。次に三箇條の根本條件につきまして聊か説明を試みませう。

### 第一 物理 條件

物理條件につきましては、古來隨分學者が注意致したことでありまして、殊に近世に至りますれば、モンテスキウや、ヘルデルや、コムトや、バックルや、ダーウィンやら、リッテルやらが出て参りまして、段々に精密に工夫してくれまして、最近のところではラッセルが人類地理學(人種地理學)と申す名を設けまして、おっぱつてこの方面の研究をして居ります。されば我等はラッセルの方針によりまして段々に研究の歩を進めますれば、物理條件のことは全然明らかになることが出来ると信じて居るのである。ラッセルは物理條件を類別して次の如くに申して居ります。

甲、人間の狀態に及ぼす影響。

イ、生理的作用。

たとへば熱帶の時候は皮膚をゆるめ、蒸發を妨げまして、爲めに身體を弱くするが如きことであります。

ロ、心理的作用。

たとへば雄大偉麗なる山水は、人間の感情を動かす類のことです。この類の影響は、一個人に働らいて居る間は、その勢力が鈍いでありますが、段々に多數の人に及ぼしまして、全國民が皆感染するに至りますると、はじめて史學の事項にあらはれて参ります。

乙、人間の意志に及ぼす影響。

イ、事を起す作用。

1、はたらかせる作用。

たとへば沿海地方の人民は漁業運搬業をはじめまして、それより段々商業を営みます類。

2、おさへる作用。

たとへば大山脈や大砂漠や大山林などが人間を遮斷致しまして、方々に飛びまわることが出来ぬやうに致します。即ち人間をおさへて、ある場所に閉ぢ籠むるはたらきの類であります。

ロ、狀態を起す作用。

1、土俗作用。

たとへば時候は、直ちに衣食住の有様に影響を及ぼします。強いて時候に適應し、あるひ



は抵抗せんが爲めに人間がいろ／＼の工夫を致します。あつければあつさよけ、寒ければさむさよけの工面を致しまするし、地面がわるければこやしこやしのいれかたに氣をつけまするし、人口が少すくなけれで水力であるとか風力であるとかいふ天然力を利用する工夫をはじめまする。即ち工藝發達の淵源をなすのでありまする類。

## 2、社會的影響。

例へば時候土地の工合によりまして、居住の國民がいかたまりとなりまして、いろ／＼生存の工夫を致しまする。實業の發達は、重にこの作用に刺激されて出来るものでありまして、自然力が比較的弱ければ、人間の抵抗力が遂に勝を占めまして、大なる實業の發達を見まするし、もし又自然力が甚だ強いですと、人間の抵抗が到底及びませんから、抑へつけられてしまつて、社會が一向發達致しません類。

ラッセルの物理條件に關する類別は、以上申上げるやうなことであります。御覽の通りこの方針に隨ひまして研究致して參らうとするには、先づ以て人類學と地理學を基礎に致しまして研究して參らんければなりません。ラッセルが人類地理學といふ名をつけましたのも蓋しこゝいらあたりから考へ出したであります。

物理條件に制せられて、ある一定の經路に發達致しました國民の著しき適例はギリシア人であり

まする。ギリシア人は、もと小アジアの沿岸地方より、ギリシアの本國に移住致しましたものであります。小アジアの沿岸地方と申し、ギリシア本國と申し、何れも皆海岸に接近した山國でありまして、山の出鼻が千態萬狀に引き裂けて、非常に込み入つた海岸線をなし、又澤山な島をつつて居ります。かやうなところに居住して居つた人民で、耕すに足る面積は至つて狭いことである。隨つて一箇所に纏まつて住まつて居まする人口は甚だ僅かのことである、聊かにても社會を發達せしめやうとするにはうちうちにふすふすぶつて居つたのでは仕方がございませんで、是非どこかへ飛びまわらなければならん。そこで太古の時代よりして黒海の北海岸邊までも飛び出しまして、あるひはクリム半島の南岸に葡萄を栽培しまして、葡萄酒を取つたり、ジバシの瀉の潮水を煮て鹽を搾らへたりなど致して、生存の法を講じて居つたのである。申さば生れつきの商人でありまして、農業などには不適當な國民でありました。今もやはり昔の通りで、ギリシアは小國ではありまするが、商業運輸業は仲々盛であります、自然それより他に産業がないのであります。

ギリシア人の國家觀念も、やはり之に伴ふものでありまして、古代のギリシア人が理想として持つて居つた國家とはいかやうなものであるかといふに、丁年以上の男であつて、社會を組織し國家を維持するだけの技倆のあるものは、悉く皆一堂の中に集まつて額を鳩めて相談を凝らすやうでなくてはならん。隨つてこれだけの人口を養ふに足るだけの田園が近邊になくてはならん。田園より



のあがりものを以てたべることだけは済まして、その以外のことは、世界のいつくの果までも思ひ切つて飛び出して自から肥やすのである。

かやうな理想でありますで、ギリシア人の國家と申すものは、我等の眼より見ますれば、實に非常な規模の小さい簡単な組織である。その社會と申すものも、甚だ單純な動物體である。先づ一堂の中に集まつて、額を鳩めて相談をこらすことの出来る人口と申すならば、丁年男子五百人が關の山でせう。それでも實はどうかと思はれるが、先づ五百人と假りに見ませう。さうすれば同數の婦人が附屬して居るものと見んならん、子供が多少これに附屬して居らう。假りに一家五人ぐらゐと見るならば、五五二千五百人の總人口であります。二千五百の人口、五百の竈數であれば、先づ以て我等の考では一村である。この村の中央に國防用の城を置きまして、村の周圍には堅牢なる城壁を築きます而して城外に必要な田園があるのである。ギリシア人の考では是非ともかういふ組織な村が立てられる地形でなくてはなりませんから、場所が極つて居ります。即ち第一、海岸地でありまして、然るべき港を控へて居ること、第二、必要以外の田園を持つて居つても、却つて厄介でありますで、成るべくは山が海へ出張つて參つて、小さい谷をなして居るところがよいのである、第三、村の中央に城山が入りますで、平原から突起しました一つの高臺が入用である、成るべくは四面共に斷崖となつて居つて、人工の石段を拵らへて登れるやうな小高いところが欲し

いのである。こゝに鎮臺を置きまして、鎮臺の建物の中に必らず鎮守の宮をおきます。それ故に平生は鎮守の宮として參詣する處なり、公園なりの類でありますが、一朝事あるの際には、全く鎮臺となります。所謂アクロポリスと申すのはこれである。ローマ人がアルクスと申し、ドイツ人がブルグと申し、ロシア人がクレムルと申すのも、本來はやはりこの類の高臺であります。

## 第二心理條件

心理條件は心理學の發達を待つてはじめて明らかに説明の出来るものでありますで、今日の心理學の姿では、遺憾ながらまだ思ふやうに説を立てる譯には參りません。しかし一通りだけは、とにかく申さんければならむから聊か申述べます。

### 甲、個人心理條件。

先づ個人心理のことより申しますが、個人は何れも皆固有の意志感情を持つて居るものでありますで、一人一人を見れば多少悉くちがふと思はねばならぬのである。しかし平均して見ますれば、大同小異のものであつて、互に多少他人の意志感情を推察することが出来るものであるのです。現に人間が一家をなし、更に進んで一社會をなすことが出来ると申すのはこの原理に基くのであります。若し互に意志やら感情やらを察することが出来ませんわけならば、人は二人と



一所に仕事をする事が出来ぬ筈である。無論意見のあはぬことは毎々であるし、一つ事にあひましても、受ける感情が違ふのも明白な次第であります。大體におきましては、自分の苦しい時は他人も苦しいし、自分の嬉しいときは人も嬉しいのであります。ほゞ折れ合ふことも出来るのであります。もつともこの間に、俗に所謂人情と申すことをよく知らねばならぬと申す重大の條件があるのです。

人間はもとより神経もあれば血もあるのである、理屈を運轉する機械ではございません、理想を傳播致しまする針金ではございません。それ故に机の上の空理屈で理屈詰めでは人間の意志感情は、打算することは勿論出来ぬのである。さればこそ人情をよく知つて居るものほど人間の意志感情を推察することが上手なので、一口に申さば世故に老いませなければわかることでないと思さねばならん。世故に老いやうと申すならば、多少年をとらねばならん、もつとも若くても多く苦勞をした人はわりに人情を知つて居る。安樂にくらして居る人は老輩でも人情には甚だ疎いのであるから、一概に年輩ばかりで人情を知る度合を察するわけには參らぬが、上に申したのは、面々が平均的苦勞をし、平均の安樂を見るものと假定して説を立てたのである。又社會の大多數の人間は、かくの如き平均の事情のもとに居るのであります。若い苦勞人や迂濶な老輩などは、いつの時代におきましても小數であるべき筈であります。

この邊に基礎を置きまして、説を立てますれば、當らずといへども遠からざる事になります。除外例は勿論あるので、除外例の場合におきましては特別の研究をすればよいのであります。例へば狂染みた人、即ち精神病學の上より云ひまするならば、精神病患者であります、精神病患者は精神病患者として解釋をしなければなりません。又千年の間には一人や半人は聖人染みた人が出ます、無論これも除外例でありますからして、特別の調査を要します。例へば宗教の教祖の如きはこの場合でありまして、何か感奮するところがあつて、一身上の榮辱を棄て、人類一般の爲めの利益を圖らるので、大抵は社會の改良か國民の統一かを企てらるのであるですから、その心得でしらべれば、教祖の心理もよくわかります。又教祖がたの教が百世の後まで遵奉せらるゝと申すのも、畢竟教祖がたが人類一般の希望を達觀して説を立てらるゝからであります。この人類一般の希望を見抜くと申すことが即ちその人々の大器量のあるところであるのである。

## 乙、社會心理條件。

茲に社會心理と申したのは、もつと通俗の言葉では時代心理とも申します。一の時代におきまして、平均の社會の人々が持つて居りまする心理のことでありまして、時代心理と申しても差はないやうであります。時代と申すものは、もとより動物でありませんからして、心理



を持つて居らう筈がありません。所謂時代心理とは、時代の社會を組織して居る人々の心理の意味でありまして、略語でありますからして、明白に社會心理と申した方がよいのである。

社會を組織して居るところの人々は、周圍の事情の變化する度毎に、之に適應して心理をかへます。大多數の人が心理をかへてしまへば社會全體の心理がかはつてくるのである、所謂時代が變つたのでありまして人々の考がまるで違つて參ります。それ故に社會心理は、無量の變化をし得るものであると申すことが出來ます。しかしながら周圍の事情の變化には大抵限りのあるものでありまして、非常に突飛な變化と申すことは、先づ以てないのですからして、社會心理の變化の仕様も、さうまるで無茶ではない筈であります。周圍の事情さへ多少の打算がつかまするならば、同時代の社會心理は多少測量できる筈である。

史學におきましては、この社會心理を測量すると申すことが甚だ重大のことでありまして、この測量がつかまされなければ、先づ史學は出來ぬものと思つて宜しいのである。我等は先づ多少測量がつかくと信じて居ります。又史學の説を立てますときには、先づ以て社會心理を測量してかゝりまして、それを基礎として先へ進むものであります。史學を學んだことのない人は、社會心理の變遷すること、一時期の社會心理の測量のことなどにつきまして、通常一向考のないものでありまして、それが爲めに我等の眼より見れば、意外千萬のあやまりを犯すことがありまする。

例へば厩戸皇子は何故に蘇我馬子を處分せられなしたのであらうか、山背大兄王は何故に自ら立つて國家を維持しやうとつとめられなしたのであらうか、何故に御自身はじめ一家を擧げて入鹿に賜ふなど、呆れられるばかりの御心よしを申さるのであらうか、社會心理の變遷を知らぬ人には、この邊のことは一向にわからぬのである。この方々は佛教の理想をそのまま斷行さるゝ御方針であつたのでありまして、その他のことをお考にならぬのであります。即ち佛教の博愛主義で、自分を犠牲にすることはあたりまへなので、衆生を安堵せしむる爲めには、唯自分だけを犠牲にすることで濟むとならば、満足して死なれたのであります。況んや有力なる佛教信者たる馬子を處分して佛教の弘通を阻害するなど申すことは、申迄もなく厩戸皇子の御本意にあるべき筈がありません。

その他之に類しました間違つた見解を立てる人が随分ありますが、何れも皆社會心理の變遷を心得ぬから來るあやまりであります。

丙、國民心理條件。

茲に國民心理と申しますのは、社會心理はいかに變遷しまするに拘はらず、すべての時期に通じまして、常に存して居ります心理の事でありまして、即ち一の國民が固有致してをります



る心理であります。社會心理は随分はげしく變遷致しまするけれども、變遷に程度がありまして根本からひっくりかへつてはしまひません、變化する部分と變化せざる部分とがあります、この變化せざる部分を抜き取りまして、特に國民心理と名けたのであります。

されば本邦人には固有の心理があります、イギリス人にはその固有の心理があります、ロシア人にもあればフランス人にもあります。かやうなる國民心理は變更を經ません周圍の事情に基いて起つて居りまするもので、主として物理條件の下に成り立つものであります。さればこそロシア人の心理は大陸的でありまして、深山の大樹の如くぼつとりとして大きい、シナ人の心理も同様でありますが、本邦人の心理は島國的である、申さば盆栽の如く、機敏ではあるがせつこましい、イギリス人の心理も同様であります。インド人の心理はヒマラヤ山の氷雪に冷されて冷え切つてしまひまして超絶的となりまして殆んど現世のことを顧みませず、とかくに超自然的のことを考へたがるのであります。フランス人はヨーロッパの四通八達の衝に居りまして、海路の便もあれば陸路の便もある、北へも出らるれば南へも出られる、運動が自由自在である結果、とかくにうつりかはりを好む性たぢがあります、久しく家に隱居して居ることは到底出來ぬ國民である、いかな境遇の下にあつても、一室に蟄居して居ることの出来る國民ではありません。かやうな次第でありますので、國民心理のことは物理條件さへ打算がつかますれば自然出て參

るのであります、社會心理よりも餘程わかりやすいのであります。歴史地理學におきましては、この方面の研究に注意を致すことであるのです。

### 第三 文化條件

最後のは文化條件であります。文化と申すのは人間が意志感情を働かせまして段々に積んで參りまする生産物でありまして、いろ／＼の方面にわたりますが、その重大なるものをいひまするならば、左の數項にわかれます。

學藝。

制度。

經濟。

甲、學藝。

第一の學藝が、國家、社會に及ぼしまする影響は、古人が已にもう大分研究致して居りまして随分よくわかつて居る様であります、とくと考へますれば、仲々まだ足りぬところがあります。その仔細は、古人は唯學藝そのもの、沿革を研究致しましたので、これを各時期の社會心理に對象致しまして研究したのではございません。それ故にその申さるゝところは雲の上を走つ



て居りました實際の社會と申す大地には觸れて居らぬのである、大地とは何等の連絡もないのである。もつとも學藝の理論だけの研究ならば、かういふ方針の研究で差がないが、何故に一派の學風が興り、何故に一派の美術がはじまり、何故に一流の教育が兆すかななどの問題に至りますと、かくの如き方針の研究では、到底事實の端緒を得ることは出来ません。

大凡學藝と申すものは、申さば一の裝飾品である、一軒の家に譬へて申さうならば書院である。端嚴に且美麗に出來て居りまして、その家の主人の理想のあるところを示して居るのである。しかしかやうなる家に住ふところの人物は、必らず多少餘裕のあるといふことを意味して居るのである。その日ぐらしの經濟のものでは、到底かやうな家にはいつて居られぬのであつて、長屋の有様を御覽になれば直ぐわかる通りに、茶の間もなければ書院もなし、奥向もなければ表向もないのである、六疊と四疊半の二間で一切が、つさいの要を辨じて居る。社會もさうで、かやうなそこの日ぐらしの經濟の有様でありますると、やはりこの長屋ぐらしに満足して居らねばならぬのでありまして、とても表であるの奥であるの茶の間であるの書院であるのと申して、それ〴〵機關を備へる譯には参りません。此の如きことの出來ますのは、已に社會に餘裕がついて居るのであつて。その餘裕によつてあらはれるところが學藝なのであります。

されば古のギリシア人は、學藝を以て鳴つて居る國民であるが、ペルシアとの大戦の前までは、

まだ〴〵社會が貧困でありまして、到底學藝に耽つて居る暇はなかつたのである。この大戦以後の時期に至りまして、從來營み來つて居ります商業が大に振ひはじめまして、富は漸々に積んで参りまするし、餘裕は出來まするし、やがて大に學藝を歓迎致したことでありまして、所謂ベリクレス時代と申す有名なる時期があらはれて参ります。いくくの國民におきましては左様でありまして、學藝を歓迎すること申すことは、本來國民心理に附屬して居ることではありません。

もつとも數多の時期に通じまして、經濟がよくつゞきますれば、習性となりまして、殆んど、國民心理の一部であるかの如き觀を呈しますが、社會が衰へますれば、やがて元の姿に返つてしまひまして、もとの木阿彌となつてしまひます。恰かも野生の樹木を持つて参りまして、これを鄭寧に培養致しまして、よくその姿勢を直しまして、數年の後には立派な庭木と致すことが出來ますが、庭木として見て居らうと申すには、絶えず注意してその姿勢なり美相なりを維持する工夫をせねばなりません。二三年棄て、置きましますといふと、已に大分衰へまするし、十年棄て、おきますれば、全くもとの木阿彌となります。あるひは此の如き木の實をとつては更に栽え、又實をとつては栽え換へるといふやうに、數十代を経ましたならば、遂には一種の變態を生じます、所謂種と申すものである。動物に於ても同様のことであります。かくの如くにしても、みぢは百餘種に上り椿も數十種に上つて居る。社會もこれと同じ道理で、經濟が數千年の間よく繼續致



しまするならば、遂には學藝が國民心理を生ずること勿論でありませうが、不幸にも古來此の如き國家社會がありましたことは、一も實例がございません。つまり經濟と申すものは、所謂まわりもちでさう長くつゞかぬものと見えます。

之を要するに、學藝と申すものゝ國家社會に及ぼす影響は、經濟のつゞく間だけと申すことでありまして、明白に社會心理に屬しまする、随つて甚しき變遷を致すものなんであります。例へば奈良朝の學藝には、同時代社會の實相をあらはしまして隋唐と本邦との化合物になつて居るのである。王朝藤原時代と下りますると、隋唐の分子を段々に失ひまして、藤原氏に至りましては、技藝の方面は專一本邦の社會心理をあらはして居るが、學術の方面におきましては、唐の惡弊のみをあらはして居りまする、全く寄生蟲の姿をなし居る、惡口をいふならば、條蟲がわいて居ると申して宜しうございませう。鎌倉時代に至りまして、やうやう學術もこの寄生蟲の姿を脱しまして、本邦の社會心理に適合するやうになつて參つたのである、これが所謂武家風の學術であります。室町時代に下りまして、この武家風の學術が一變しまして、宋元の影響を大に蒙りまして、江戸時代になりますると、全く南宋の學術を本邦の國民心理に接木致した姿であります。技藝の方面は之に反しまして、室町時代におきましては宋元を接木致しました姿でありましたが、江戸時代となりまして全く本邦の特色をあらはして來ました。

何れの國へ參りましても學藝條件をしらべるには、上に申上げましたやうな風に調査致していただきたいものであるでありまして、さなければ重大の條件として、史學がたのみに致しますだけの價值がございません。

#### 乙、制度。

第二の制度と申すのは、法令をはじめ百般の制度を包含して申しましたので、主として國家方面に屬するものであります。この方の研究も、昔より人々がやつて居りまして、いつくの國におきましても、大抵はそのしらべがついて居りまする。制度史と申すものは即ちこれなので、改めて申上げるまでもないことなのである。しかし從來人が研究致して居りまする制度史と申すのは法令をはじめまして、百般の制度が時代のうつりかはりますると共に、變化を経て參りまするのを述べましたものでありまして、社會とはよほど縁を離れて説いてあるものであります。しかし我等の著眼しますところは、かやうに空に法令などの文章を讀み碎きまして、その精神の變遷ばかりを述べ立て、ゆくのではなくて、どういふ社會心理のときには、どういふ制度が行はれて居つて、その社會心理がうつりかはつてゆくに随つて制度がどういふ風にうつりかはつて來たのであるか、あるひは社會心理はうつりかはつてゆくのに、制度ばかりは變らなんだ故、遂には制度は空文となつてしまつて、まるで社會には行はれて居らんとか、あるひは社會心理はその



割に變つて居らんに、制度の方ばかりが頻りにうつりかはつてゆくとかいふやうに、常に制度と社會とを聯絡して、この二つのものゝ關係を沿革的に研究致したいことである。勿論近頃の史家は、何れもこの方針で制度史を研究するのでありますで、やがては纏まつた成績が出て参りませうが、まだ前途遠遠であります。

とにかくこの方面の研究が、史學に重大であるといふことは、よく人か認めて居りますので、改めて我等が言葉を添へるには及びません。

### 丙、經濟。

第三の經濟でありますが、このことは不幸にも從來の學者が一向頓着せぬか、あるひは聊か氣をつけて見たところが、經濟の原則など申すことを、頓と御存知ない方々だつたからして、その説は役に立たぬのであります。これは獨り本邦のみならず、ヨーロッパにおきましても同様のことでありまして、經濟事情を條件として見るときには、社會心理がどういふ風にかはつてゆくといふこと、言葉を換へていふならば、經濟と社會との關係を沿革的に調査することであり、これが、これは極々近頃まで、經濟學者も史學家も、共に眼中に置かなかつたことであります。否眼中に置かぬのみならず、全く氣がつかないのであります。考へて見れば迂濶千萬な話であります。事實さうだから仕方がありませんが、段々近頃になつて、經濟事情といふことは

社會にとつて極々重大なことといふことをいひはじめまして、ドイツのマルクスやイギリスのロジャースやアメリカのセリグマンなどやらがいたく鼓吹致しまするので、段々この流義の人々が殖えて参りますのは我等甚だ喜ぶところである。

しかし本邦におきましては、經濟條件の研究をやります人は極く少いので、よしあつたところが、とかく世間の人々に厭がられました、何か好んで汚いことでもいふやうに思はれて居るやうです。經濟條件の研究は、決して汚いことではありません、人間の身體で申すならば、消化器の組織、生理、機能の學理を一個人の身體にあてはめまして、その人の健康の程度を見ますことでありまして、非常に重大な事であるのであります。醫師が病人に接します度毎に、常に着眼することでありまして、回復期の病人などにおきましては最もやかましく申聞けるところであるのです。一個人から成り立つて居ります社會におきましても、國家におきましても、やはりこの消化器の組織、生理、機能と申すことをよく注意してしらべんければならんことでありまして、所謂經濟學と申すのは、この學問であります。經濟學の原則と社會との關係を、沿革的に研究致しまするのを、好んで汚いことを取調べるやうに心得て居るのは我等甚だその意を得ぬことでありまして、國家なり社會なりの生存して參れる方法を取調べる必要がないと主張されるに近いと思はれます。



史學を確實に研究致さうと致しますれば、必らずこの經濟條件と申すことをよくしらべてかゝらんければ、社會の仕事の有様が到底わかる筈がないのであります。例へばローマの共和政治時代の歴史を研究しまするに、經濟條件を蔑ないがしろに致しましては、あたまから何もわかりません。中世の知行制度の歴史をしらべまするにも、經濟條件を顧みませんことゝ致したならば、まるで眞暗闇まっくらになつてしまひます。本邦の武家の歴史も左様であつて、經濟條件といふものゝあることを忘れましてしまひます。一向解釋がつきません。それ故にこの三つの場合におきましては、隨分古くより研究者が經濟條件の重大なることを知つて居ります。他の場合におきましては、左様なので、鳥渡見れば經濟條件を考へる必要がないかの如く思はれる場合でも、よく考へて見まするとやはり重大の關係を持つて居ります。何様一個人は食物を食はずに生きて居られんが如くに、國家も社會も經濟が相當でありませなければ、生存して參れません。

經濟のよく整つて居りまするは、國家社會にとりまして、恰かも一個人の身體に對しまして、消化器がよく整ふて居ると同じことであります。一個人のからだからだであれば、消化器が紊れますれば、食物がその效力を致しません、即ち血液が減少します、又血液の品質が落ちて參ります、即ち全身のもろゝの機關が、その機能を適當に働らかせることが出来ません。是に於て全身の衰弱を來します、所謂貧血症であります。國家社會におきましてはその通りでありまして、經

濟が紊れて參りますれば、必らず衰へます、國家社會におけるもろゝの機關が滑らかに運轉致しません。是に於て國家なり社會なりが共に衰へます。若しその儘で長い間つゞきまするならば、國家は亡び、社會は衰へます。現に西ローマは、老衰の結果、消化機關が運轉しなくなりまして、その上に食物も缺乏致しまして、貧血症に陥りまして、揚句あげくの果は全身衰弱のために死んでしまつたのである。

この邊のところを篤と味はれて文化條件の中の經濟事項なるものを、特に重く取扱つていたゞきたいものである。

此に實例としてロジャースが兩薔薇ばら之役に就て下しました解釋を御披露致しませう。

十五世紀中は、予が述べたる如く、饑饉の起りしは僅に一年のみにて、疫病記事は殆ど之を見ず、年代記家や農民やは收穫の皆無なりし歳々や、ひでりやふりつゞきの夏ありしを報ずるも、一四七七年、八年、九年に至るまでは、病氣のはやりし沙汰なし、一四八五年に汗の出づる病氣行はれ、ロンドン町役人の如き概ね相應にくらせる町人を侵したる如く見ゆ、然し十五世紀には社會の病氣ありて重大の結果を生じたりき、この事はイギリスの政治的社會的生活に於て最も困難なる時代に方り、次三男の出現なりき。教會は甚しく腐敗したりき、寺院は貪婪放逸なる僧徒の巢窟くわくなりき、工匠は rollers 派に歸依したりき。貴族は到る處に敵打争闘を



縦にしたりき。小前百姓は殊の外に榮えたりしも、是の紛争には與らざりし如く見ゆ。

大地主が自ら其田園を耕したりし間は、個人財産は澤山にありて、之を次三男に分くるにも事缺かざりき、田園家畜を貸付けし時代となりても、猶ほ之が爲に資財はありき。然るに十五世紀の央頃に至りては、百姓は或は田園を買入れ、或は家畜を所有したれば、借受家畜を附けず田園を取れり。小田園を買入るゝ者尠からざりしかば、土地は十年二十年賦の買得にまで騰貴したりき。是の世紀の土地買煽の爲に貴族や旗下の歴々までコピイホルド權を買入れしかば、コンモン・ローに據りて小作人となりはてけり。彼等は其都合にまかせて、法律上の不平等を以て不公平なりと唱へたるウィクリフの主義に左袒して、かの賤しき土地所有權の負擔を改廢せしめたりき、(中略)。次三男は甚しく貧乏したり。フランスとの戦役の續きし間は、奉公口はあり、運も好くつましくもすれば、随分と身代を作り上げしなりき。然し分捕物は滅多にへばりつかぬ、戦役はフランスに於て終りとなりたり、まもなくイングランドに於て始まりたり、全國はなりあがり、武人もて充ち満ちたり、彼等は折のあり次第に、セイント・オルバンスよりボスワースまで、三十年の間野戦とゲリリヤ戦とを續けたりき。エドワルド及び其判事等が世襲財産を破る工夫を廻らしたりし時、其旨趣のある所を知りしなりき、黨派の殘類各側に於て僅に五千許りボスワースに於て戦ひたりき、其餘は荒地やムーアやに其骸を曝したるなりき。

歴史之經濟的解釋、卷二、  
第十二章二六四—二六五頁

ロジャース又曰く。

皇室領が最低點まで減りしは、ヘンリー六世の治世の間なりき、フランス戦役の物入も莫大なりき、フランスに於て收めたる増地も利益なかりしこと疑なし、然れど若皇の幼冲の間には他の原因も効果を生じたりき、尤も其治世はいつも未成年なりしかど……皇が十一、二歳の央頃、一四三三年十月十八日議會に提出せられし報告に據れば歳入は、ランカスター公領を除きて、聊か九千ポンドを越ゆるに過ぎざるまでに下りたり。歳出の重なる款項は、ウィンズール宮勝手向費壹萬三千六百七十八ポンド、皇族方賄費壹萬壹千五百五十二ポンド、マーチエス及びアイルランド支配費壹萬零八百九十九ポンド、カレー同費壹萬壹千九百十三ポンドにて、入費總計は五萬六千八百七十八ポンド也、即ち收入を越すこと四萬七千八百七十七ポンドなりき。又未済の借金は拾六萬四千八百十五ポンドに上り、其外に低當差入の負債ありき、勿論皇室領の多分は、永代或は一時限り手放され、皇室の分家は固より、貴族方の數多も歳入に寄り居たりしは明白なり。(下略)

是の皇室領の總分捕とわけまへよりはねのけられし面々の憤怒とは、十五世紀の兇暴なる争鬪を助長し且繼續せしめたりしこと、更に其疑あるべからず、セイント・オルバンスの小せりあ



ひより、ポスウァースの野戦に至るまで、三十年以上も續きたる内亂は、之を要するに、黨派者流の戰爭なりき。東部諸都のロルラード信徒が、ランカスター派よりもヨーク派を慕ひしを格別とすれば——前派はこの信徒を迫害したりしも、後派は之を寛恕したりし如く見ゆ——人民は是の戰爭に殆ど關らざりしなり。然るにスコットランド境の二三者を覺束ながらも取除けば——然し此處のペーシイ家は激しきランカスター派なりき——貴族といふ貴族は大概紛争に手を出したりき。

(上略) 儲是の内亂が、イギリス人民の總體に響かざりし證據は、イングランドの状態が十五世紀中に著き進歩を顯し又蕪を切るやうに刎首したりし事の最中もなかに、軍事事件の爲に損害若くは動搖を生じたりとの苦情を一切聞かざることにあるべし。諸君も亦是の承繼の役は、主として野戦より成り、攻城の事之れなかりしを觀察せられむ、而して珍しきことは、舊時代の堅固なる城がまへの館が紛争の最中に防備したる邸と換はることにて、此の如き邸は聊かながら防禦の方を付けたれど、固より知行制度時代の城の如き堅砦にては非らざりしなり。同書卷二、第十九章 四一八—四一九頁

## 理論史學

我等が理論史學と申すのは、俗に歴史哲學と申すものゝことであります。これを俗語と申しては、御氣に食はぬ人があるかも知れぬが、我等は斷然俗語であると主張するものである。世間には往々何か理窟がましいことできへあれば、これに哲學と名をつける癖の人があります、これは十八世紀の學風の名残でありまして、今の世の中には陳腐なのである。この流義によりますれば、物理學を自然哲學、理化學を舍密せえみ哲學、法理學を法律哲學など、申すので、哲學と申す言葉を濫用致しまする結果は、處世哲學、色道哲學など、申す滑稽な言葉さへ出て参ります。かやうな次第で、名稱が甚だ面白くありません、又誤解の患もないではありませんから、我等は明白に理論史學と申したのである。

この方面におきましては、國家社會と史學との關係を根本的に研究致しまして、いかなる大原則によりまして、國家社會が發展するのであるか、その理法を知りたいものであるかであります。その希望中の二三の題を例として申し上げますならば、人生には果して一定の目的があるかどうか、若し目的があるものならば、終始一貫して五千年このかた史學にあらはれて居るものであるかどうか、社會と申すものは、果してどういふ目的を持つて居るものであらうか、又目的があるならば、やはりこれも五千年以來終始一貫して行はれて居るものであるかどうか、國家も左様で、終始一貫して進むべき理想を持つて居るものであるかどうか、その他これに類似の題を掲げて研究するものであります、史學の方から研究してもよければ哲學の方から研究してもよいのであります。つまり史學と哲



學の共有領分であります。

もつとも史學は日進の學問でありますので、今日の進歩程度に於ては此の如く申しまするけれども、他日史學が大に進歩しましたる曉には、理論史學全部を擧げまして、純粹の史學の範圍と致すことがあるかも知れぬのである。しかし史學の研究方針は科學的でありまして、とるべき手續は自然科學の例に倣つて居ることありますので、何分理論史學の問題に對しましては、現今の史學は思ふやうに口が利けぬのであります。それ故に哲學を勧誘しまして、この方面の研究に應援をしていただきたいのです。

右の次第でありますので、今日の史學の程度におきましては、理論史學は論せずとも可なるものであります。もとよりこの方面に熱心の方々は銳意に御研究下さることを希望しますが、史家と致しましては、これに至りません途中に、まだく研究致すべきことが山の様にありますので、仲々此まで手が届き兼ねます。

從來の經驗に徴しまするに、理論史學は名稱の通り、専ら哲學の方面より哲學者が研究してくれましたこと、その研究方針は専ら哲學的であります。たしかにわかつて居ります確實の事實を適宜に組み合はせまして、これを基礎として説を立てられるが、とかく土臺が小さ過ぎるか、あるひは弱いかでありまして、建築物が立つや否や、直ぐに狂つたり歪ゆがみが出たり甚しきに至つてはひっくり

かへつてしまつて困るのである。畢竟史學がこの程度まで進んで居らぬのに拘はらず、一足飛とくひに大建築をつくられやうと思はれるからの氣早い了見から來るのでありませう。

何様人間の意志感情で一旦立てました考が、幸にして人類多數の意志感情に暗合あはすることがありますと、それが一類の社會勢力となりまして、往々數百年の間持續してあらはれますので、この勢力が社會に及ぼすところの作用を深く研究するところの必要があるのであります。哲學の方では専らこの點に意を注ぎまして、理論史學の研究をやりますが、何様これは史家よりも哲學者の方が立入り易い問題でありますので、我等は宜しく哲學にこの邊の研究を願つて置きたいのである。それで若しこの研究が終了致しまして確定致しました結果が出て参りますれば、直ぐに之を教育に應用することが出来ます。この邊より考へますれば教育學専門の方々も、理論史學のことには御注意あつて宜しいかと思ひます。

とにかく問題が問題でありますので、往々雲の中へはいつてしまひまして、實際の社會を度外たがに置く傾向のあるのは我等甚だ遺憾とするところであるのです。

以上申上げたところは甚だ簡單ではあるが、理論史學と申すものはどういふ性質のものであるかといふことを大體申上げましたつもりであります。これより尙委しく理論史學のことを申さうと思へば、勢古代より最近の時代に至りまするまでに、理論史學の研究に手をつけました人々の學説を一々



列挙しなければならんことゝなります。此の如きことを致しますのは、理論史學を題と致しまして講義を致しまするには必要でございませうが、我等のやうに史學の研究法を題と致して居る名残に参考の爲め申述べまする場合にはかやうなことを致す必要があると認めません。よつて研究法の講義と致しましては、こゝに終を結びます。

改訂 史學研究法 終  
增補

大正十五年五月二十五日初版發行  
昭和五年四月十五日改訂增補三版印刷  
昭和五年四月二十日改訂增補三版發行

改訂 史學研究法  
增補 定價金四圓五十錢



著作者檢印

著者

坪井九馬三

發行者

東京市神田區淡路町二ノ二  
鈴木 木 芄

印刷者

東京市神田區淡路町二ノ二  
諸根 樟 一

東京市神田區淡路町二ノ二番地

發行所

京 文 社

電話 神田 三九〇・三九二番  
振替 東京 八二二六番

(行印所刷印口溝)



